

平井勝利教授の「中国語教師養成講座」

—日本語話者に対する中国語教育—

Professor Katsutoshi Hirai's "Chinese Teacher Training Course"

: Teaching Chinese to Japanese Speakers

成戸 浩嗣 Koji NARUTO

(現代マネジメント学部)

抄 録

筆者の恩師である平井勝利教授は名古屋大学で研究・教育にあたられる傍ら、1984年には名古屋駅前(名古屋市中村区名駅 4-13-7 柳橋食品ビル 3F)に「名古屋中国語教室(のち、名古屋中国語学院と改称)」を設立され、学生や社会人の中国語教育にあたられるようになった。受講者のレベルや目的に応じた多くのクラスが設けられ、2005年には「中国語教師養成講座」が開設された。筆者もその第1期(4月～9月)の受講生となり、中国語教育に必要な知識、中国語における様々な現象を観察する際の視点の置き方などを学ぶことができた。同講座では、期によって異なる中国語教科書が使用され、ポイントのとり上げ方や説明の仕方についての検討を行なうことを中心に授業がすすめられた。語られた内容の中には、受講者が大学などで中国語の講義をする場合のスタンダードな説明と異なるものも少なくなく、中国語という言語に対する従来の見方が必ずしも正しいとは限らないことを痛感させられたものである。このことは、成戸2009の序文における同教授の以下のような言葉に集約されている。

中国語学研究の分野においては、英語を言語素材として構築された言語理論と英語を対象とした分析の手法に基づいた研究が圧倒的に多いのであるが、そもそも中国語という言語はその言語を使用して生活している民族集団のコトガラに対する認識や言語表出のメカニズムも表出された言語形式のふるまいも、英語とは本質的に異なっているにもかかわらず、それを適用するわけであるから、どんなに体裁がとりつくろわれ、カッコよく見えても、その成果が期待できないことは推して知るべしである。

文法論ひとつをとってもいまだ発展途上にあると言ってよく、このことはむしろ、中国語研究にまだまだ開拓可能な領域があることを意味している。英語をはじめとした欧米言語を対象とする既存の理論を中国語に適用してその構造を明らかにするという作業は、中国語の輪郭を大まかに記述するために必要であったと考えられる(平井教授によれば、そもそも言語については、大まかな体系・構造が設定できるのみである)し、それに携わった先人の苦労も大変なものであったと想像される。後進の我々がなすべきことは、先行研究の蓄積を生かしつつもその不備を修正し、中国語の実態に合った、すなわち中国語独自の現象にスポットをあてた一貫性のある説明を可能ならしめるような成果を提示することであろう。

ところで、現在では様々な中国語教科書が市場に出回っている。テキストの種類が急激に増え始めたのは80年代の中ごろ以降のことであり、それまで中国語の教材をあつかっていなかった出版社も参入してくるようになった。ニュース、インタビュー、大統領演説、映画、ポップスなどに特化した内容のものなども含めバラエティに富む英語教科書とは比較にならないものの、中国語教科書もずいぶんと多彩になった。これらは歓迎すべきことであるが、一方では、高校までの英語教育における文科省指導要領のような統一基準がないことや、教科書検定というものがないこともあって、いろいろな入門・初級教科書を比較すると、用いられる用語や説明が異なっているだけでなく、規範文法と記述文法(学校文法と科学文法)の違いというだけではすまされないような、言語事実を見誤っていると思われるものも散見される。国内における中国語教育は

多くの場合大学で行なわれており、大学教育で使用することを前提とした場合、教科書によって異なる記述がみられることはむしろ格好の教育材料となることもある。「なぜこのように異なるのか？」をきっかけとして、中国語という言語の本質的な部分について語ることができるからである。この部分を前面に出した教科書が存在してもよいのではないかと思うことすらある。時代の変遷により、大学の外国語教育に求められるものも以前とは異なってきたとはいえ、疑問点や課題を自ら発見し、それについて調べたり考えたりして自分なりの答えを導き出す力を養うことが大学で学ぶ目的であるという点で変わりはないはずである。統一的な指導要領や教科書がないということは、教える側が必要に応じ、自己の見解を交えて解説を行なうことが求められるということであり、高校教育とは違った意味で重い責任を負うということにほかならない。

さて、同講座では、受講者自身が授業をする場面を想定し、全員の前でポイントの説明を行なうということが時々行なわれた。聞く側は中国語教師をはじめとするベテラン揃いであり、筆者も「針のムシロ」に座らされた気分で行なった。一通り説明が終わった段階で、平井教授や受講生からの講評および意見が出されるのであるが、中国語という言語の本質的な部分について改めて考えさせられることが多かった。中国語を専門とする者にとって、自分が手掛けてきたテーマおよびそれに関連する現象については一定の見解を述べるができるものの、それ以外は白紙もしくはそれに近い状態というケースも少なくない。むろん、研究作業を行なった年月の長さに比例して研究者自身の力量が上がり、洞察力も養われるため、新たなテーマを前にしても様々な観点からアプローチを試みるできるようになっていくのであろうが、厳密な説明を行なうためには「仕切り直し」が必要となる。一方、学ぶ側は研究レベルの内容を期待しているわけではないため、中国語の本質をとらえた説明でありながらも簡潔明瞭であることが求められる。

本稿は、同講座での平井教授による講義(以下、「平井講義」とする)でとり上げられた中国語の諸現象のうち、音声面のそれを除いた部分(語彙・文法)に関するもののいくつかを紹介するとともに、可能な範囲内で筆者のコメントを加えることにより、中国語教育のあり方について改めて考える材料を提供することを目的とする。講義の記述については、同一テーマについての第1期より複数期にわたる内容をまとめていること、とり上げられる内容も期を重ねるにつれて少しずつ変わっており、筆者が受講できなかった期の内容は含まれていないことをお断りしておく。

キーワード

機能語 function word 題目(主題) topic 動詞／補語 verb/complement 文 sentence
アスペクト aspect

目次

- 1 中国語の本質的な特徴
 - 1.1 漢字の意味と「機能語」
 - 1.2 「題目(Topic)＋説明」について
 - 1.3 事実指向と立場指向
 - 1.4 語順について
- 2 動詞、補語をめぐる問題
 - 2.1 動詞と形容詞
 - 2.2 動詞の自他の問題
 - 2.3 結果補語について
 - 2.4 助動詞と可能補語
- 3 文をめぐる問題
 - 3.1 諾否疑問文と反復疑問文
 - 3.2 聞き手に配慮したやわらかい表現
 - 3.3 前置詞句を用いた動詞表現の否定形
- 4 アスペクトをめぐる問題

- 4.1 進行表現と“呢”、“在”、“-着”
- 4.2 “-了”、“-着”について
- 4.3 “-了”、“-过”について
- 5 おわりに

1 中国語の本質的な特徴

中国語は表意文字によって表わされ、いわゆる語や文の分析もこのことを抜きにしては語れない。先人たちは、欧米言語の理論を用いた従来の分析方法によって処理しきれないものをどのようにあつかうかで苦慮してきた。表意文字を用いるということは具体的概念を並べて言語化することであり、他言語に比べると語順が格段に重要な地位を占めると同時に、事実指向の傾向を生んだと思われる。

1.1 漢字の意味と「機能語」

平井講義①

漢字は表意文字である。中国語(文法)の記述においては、語を「実詞(実質的な概念を表わす)」、「虚詞(文法的関係を示す)」に分類した上で様々な言語現象の説明が行なわれてきた。しかし実際には、すべての漢字が意味をもっている。「実詞」と「虚詞」は明確に区別できるものではなく、両者の間には連続性があり、いずれの性格がより強いかの点で差異があるに過ぎないというのが実態であろう。従って、中国語における諸現象を説明する場合に「機能語」という用語を使用するのは避けた方がよい。動詞に後置される“-了/着/过”はいずれも機能語であるという見解が支配的だが、これらとてやはり意味を表わしていることに変わりはない。また、例えば

(1) 请坐。

のような依頼表現に用いられる“请”は英語の“please”と等価ではない。この表現は

(2) 我请你坐。

の意味を表わしており、“请”の動詞としての原義が生きている。一方で、使役表現に用いられる“叫”、“让”の場合には、前者が「嫌がっているのを無理やりそうさせる」ことを、後者が「そうしたがっているからさせる」ことを表わすとされるものの、その

ような区別は現在ではなくなっており、語彙の意味は希薄となっている。

筆者のコメント

相手に動作・行為を依頼する場合に用いられる“请・N+V”は、“叫/让・N+V”などと同様に使役形式としての性格を有しており、そのように位置づけている記述もみられる(この点については成戸2018b:71で述べた)。(1)のような“请”表現が使役表現の典型例として挙げられることはないものの、

(3) 我们请老师唱歌。 (3)' 老师让我们唱歌。

あるいは両者が併用された

(4) 老师让我们唱歌, 我们也请老师唱歌。

からもみてとれるように、“请・N+V”は相手に動作・行為をさせようとすることを表わす点において典型的な使役形式との間に連続性を有するということができる。教育の場合においては、使役形式として“使・N+V”、“叫/让・N+V”をとり上げるのが通例であるが、これらのほかに“给・N+V”形式をとる

(5) 我给他穿衣服。

(私は彼に服を着(さ)せてあげる。)

(来思平・相原茂著/喜多山幸子編訳 1993: 130 を一部修正)

のようなケースも存在する。いずれも使役表現の系列を構成し、用いられる使役動詞の語彙的意味によって使い分けられる。“请”、“叫”、“让”、“使”、“给”の各成分が語彙的意味をどの程度とどめているか(=動詞としての性格をどの程度とどめているか)、機能語としての働きをどの程度備えるに至っているかは一様ではなく、これらを用いた形式の中には、語彙項目と文法項目の中間に位置する「擬似文法形

式(quasi-grammatical form)」、語彙項目が文法項目に移行する中間の段階にある「混合形式(hybrid form)」と位置づけるのがふさわしい“給・N+V”のようなものも含まれている(この点については成戸 2016 a :32-33 で述べた)。また、平井教授は、使役表現を構成する“叫”、“让”の区別がなくなっているとされており、同様の現象は英語の“make”、“let”にもみられる(これらの点については成戸 2016 b :28-29、同 2018 a :41 でとり上げた)。但し、個別の表現例においては両者のいずれが適格であるか(or より適格であるか)の判定がそれぞれの原義と矛盾すること、例えば、使役の強制度が極めて強い場合に“让”の方が適格であるといったようなことはありえないと思われる。

一方、中国語の前置詞は英語のそれとは異なって元来が動詞であり、前置詞、動詞いずれとしても働くものが少なくなく、ある成分をいずれに分類するかについて意見が分かれることもある。“用”を例にとれば、“用・N+V”表現を連動式とする見方、“前置詞・N+V”表現とする見方のいずれも存在する¹⁾。また、同じ前置詞であっても、動詞的性格がより強いケースから機能語的性格がより強いケースまで幅があり、例えば“在・トコロ+V”表現において主体がトコロに存在する

(6) 我**在**阅览室看报纸。(成戸 2009:62)

と、存在しない

(7) 我**在**电视里看足球比赛。(同上:63)

では、(6)における“在”の方が語彙的意味をより強くとどめている、すなわち動詞としての性格をより強くとどめており、(7)におけるそれは機能語としての性格がより強くなっているといえることができる²⁾。さらに、“被”が被害の受け身を表わす用法を出発点とし、欧米言語の文法の影響を受けてその働きを広げていったことはよく知られているが、これも機能語としての性格を強めた例であろう。ちなみに、「動詞+結果補語」の形で「動作の目的達成」を表わすとされる“V到/着(zháo)/上”にも字義による使い分けがみられるが、この点については成戸 2014 の第 I 部第 2 章で述べたので詳細はそちらにゆずる。

1.2 題目(Topic)+説明」について

平井講義②

中国語教育においては、述語の中心となる成分(主要部分)によって分けられた 4 文型(名詞述語文、動詞述語文、形容詞述語文、主述述語文)を前提に文の説明がなされるのが通例であるが、4 文型は中国語の実態を反映するものではない。中国語表現の基本的な構造は、「主語+述語」ではなく、「題目(Topic)+説明」とみるべきであり、「主語」よりは「題目(Topic)」という概念を用いる方がより適格に説明することができる³⁾。その根拠の一つとして、“A 是 B”形式の表現において A の後にポーズが置かれることが挙げられる(英語表現の場合は be 動詞の後にポーズが置かれる)⁴⁾。「主語」なる概念をもうけることは、主格のものしか文頭にあらわれることのない英語においては適切かも知れない⁵⁾。英語をはじめとする印欧諸語(インド・ヨーロッパ語族)においては、文法形式と文法範疇が一对一で対応する。しかしながら、シナ・チベット語族に属する中国語の場合にはそのような対応がみられず、例えば

(8) 我买来了**那朵花**。 (9) **那朵花**我买来了。

のいずれも成立可能である⁶⁾。また、「主語」という用語を用いるのであれば、(8)が典型的表現であることが前提となるが、そのように決めてかかるべきではない。(8)を典型的表現と位置づければ、(9)は(8)における目的語“那朵花”が「提前」された表現であるということになるが、果たしてそれでよいのであろうか。(9)と同様に、

(10) **车**，她骑去了。

も目的語が「提前」された表現とされることがあるが、そのような説明は間違っている⁷⁾。「提前」というのは、説明の便宜上のものであるにすぎない。(10)と

(11) 她骑**车**去了。

では使われる場面が異なる。両者は知的意味が同一であっても異なった表現なのである。(10)についても「題目(Topic)+説明」と解すべきであって、「主述述語文」と解するのは問題である(「主述述語文」

という呼称も中国語において「主語」なる概念を認めることを前提としている。英語においては、主格でないものが文頭に置かれた

(12) *The book bought.

は成立しない⁸⁾。一方、中国語や日本語においては

(13) 那本书买了。 (13)' あの本ハ買った。

が成立し、主格でないものを表現の中心に置くことができる。日本語表現の基本構造は「題目(Topic)＋説明」であり⁹⁾、この点においては中国語と共通している。英語とは言語としてのふるまいが異なる中国語や日本語に「主語」なる概念を導入して、どこまで普遍的な説明ができるのかという疑問はなかなか払拭できないのである。そもそも中国語という言語は、context free(あるいは situation free)では表現内容を確定することができないのであり¹⁰⁾、様々な言語現象をとり上げてネイティブ・チェックを行なう場合にもこの点に気をつけなければならない。

筆者のコメント

(9)、(10)と同様の表現例としては、例えば

(14) 工作他做完了。(加納ほか 1991:73)

(15) 那种杂志我没有。(同上)

(16) 晚饭你吃了没有？(同上:76)

などが挙げられる。加納ほか 1991:73 において(14)、(15)を

(17) 她个子很高。(同上:73)

(18) 我头疼。(同上)

のような状態表現とともに『あの娘は背が高い』の表現としたのは、これらがいずれも「題目(Topic)＋説明」構造である点をふまえてのことである。同様のことは、いわゆる「程度補語」を用いた

(19) 汉语，他说得很好。

のような表現についてもあてはまる。教科書によっては、「程度補語」の例として

(20) 他说汉语说得很好。

(21) 他汉语说得很好。

のようなケースを挙げるにとどめるものもあるが、(20)、(21)は“他”について述べた表現¹¹⁾、(19)は“汉语”について述べた表現である。

中国語表現の構造を「題目(Topic)＋説明」とみた場合、「自然被動文(意味上の受け身文)」という概念を設定する必要はなくなる¹²⁾。成戸 2009:277-278 では、動作の客体と考えられるモノが表現の中心となっている

(22) 我的书放在桌子上。(成戸 2009:277)

のような“モノ＋V＋在・トコロ”表現を自然被動文とみるか自動詞文とみるかに関して意見が分かれている点について紹介し、このような見解の相違がみられるのは中国語の表現が基本的に「題目(Topic)＋説明」という形をとるためであるとした。ちなみに、「主語」、「自然被動文」という概念を用いて中国語表現の構造を説明することの限界を端的に示すのが、

(23) 鸡不吃了。

(ニワトリが[えさを]食べなくなった。／ニワトリを[わたしは]食べなくなった。)

(興水 1985:7)

のような多義表現の存在であり¹³⁾、このような表現には中国語という言語の本質が如実にあらわれている。

1.3 事実指向と立場指向

平井講義③

日本語話者からみると、“借”は「借りる」、「貸す」という二つの動作を表わすようにみえるが、“A借B”形式の表現は、「AとBの間に貸し借りの関係がある」という事実を表わしているだけである。“給”も「アゲル(ヤル)・サシアゲル」、「クレル・クダサル」という二つの動作を表わしているようにみえるが、“A给B”形式の表現は、「AからBに具象物(or 抽象的なこと)が移る」という事実を表わしているだけである。“借”、“给”はいずれも動作の方向性を含んでおらず、

- (24) 我给朋友。 (25) 朋友给我。

のように主体と客体の位置が異なった表現を形成するのみである。これらのことは、中国語は事実指向(事実を述べる)の傾向が、日本語は立場指向の傾向が強いことを示している。一方、“看病”の場合は、日本語では「診察する」、「診察を受ける」のように異なる表現をするのに対し、中国語では

- (26) 大夫看病。 (27) 我去医院看病。

のように主体、客体がいずれも文頭に置かれる。同様のことは“上课”、“打败”についてもあてはまる。中国語では当事者の間にあるコトガラが発生しているという内容のみを表わし、コトガラに対して当事者がどのような関わりをもっているかは場面や話の流れの中で確定されるのに対し、日本語では常に特定の当事者の立場に立ってコトガラを表わす傾向がある。このため、中国語では一語で表現されるものが日本語では二語となったりする。端的に言えば、例えば

A + いじめる + B

の形で「AがBをいじめる」、「AがBにいじめられる」のいずれを表わすことも可能であり、平井講義②で述べたように、中国語では、具体的な場面や文脈がなければ表現内容を確定することができないのである。

筆者のコメント

“给”、“看病”、“上课”は、入門・初級段階の教科書に必ずと言っていいほど登場する成分である。これらのうち、文法のポイントとしてとり上げられるのは“给”であり、他の二者は「新出語彙」として紹介されるのが通例である(“打败”が登場するのはまれであろう)。また、「借りる」、「貸す」のいずれにも対応する“借”は、

- (28) 他向我借钱，可是我没借。
(彼はわたしから金を借りようとしたが、わたしは貸さなかった。)
(『中日大辞典』“借”の項)

のような例が辞書に収録されているものの、

- (29) 张三借了李四十块钱。
(張三は李四から十円借りた。／張三は李四に十円貸した。)
(アン・Y・ハシモト著／中川・木村訳 1986: 28)

のような多義表現が存在することあつてか、教科書では「借りる」に対応する例が示され、「貸す」に対応する例としては

- (29)′ 张三借给了李四十块钱。
(張三は李四に十円貸した。)(同上)

のような“借给”形式をとるケースが挙げられることがしばしばである¹⁴⁾。また、“借”が“给・N + V”形式に用いられた

- (30) 我给他借了好几本书。(朱德熙 1980:160)

が朱德熙 1980:160 のいうように

- (31) 我替他出借了好几本书。(同上)
(32) 我替他从别人那里借了好几本书。(同上)
(33) 我从别人那里借了好几本书给他。(同上)

のいずれに解することも可能な多義表現となるのは、“借”が事実のみを表わし方向性を含んでいないことが大きく影響していると考えられる¹⁵⁾。

ついでながら、日本語では相反する方向性をもった異なる動作として別個の動詞により表わされるのに対し、他の言語では一つの動詞によって表わされる例としては、成戸 2014 の第Ⅱ部第2章でとり上げたフランス語の“apprendre(習う・学ぶ／教える)”、“louer(借りる＝賃借りする／貸す＝賃貸する)”などがある。但し、このようなケースがあるからといって、フランス語は事実指向の傾向が強いと即断することは避けた方がよく、言語全体の傾向については他の側面からのアプローチも必要である。事実指向の傾向が強いとされる中国語の性質についても、動詞の用法以外の面からの観察が必要であり、その一つとして、中国語表現の基本的な構造が「題目(Topic) + 説明」であるということが挙げられよう。1.2 で挙げた

- (23) 鸡不吃了。

の場合、“鸡”と“不吃了”の関係は二通りに解されるが、いずれかに確定するためには具体的な場面が不可欠であることからみれば、“不吃了”の部分は事実のみを表わしているということができよう。

1.4 語順について

平井講義④

中国語において表現の中心(文頭)に置かれるのは、何について述べるかを表わす成分であって、話し手と聞き手の間で共通理解されているもの、「定(definite)／既知」のものである点で、既知、未知を問わない英語や日本語の場合とは異なる。このことを端的に示す例としては、よく知られている

(34) 人来了。

(35) 来人了。(＝有人来了。)

があり、(34)の“人”は「定／既知」の人物、(35)の“人”は「不定(undefinite)／未知」の「誰か」である。同様に、

(36) A：外面还下着雨呢吗？

B：雨哪，雨还下着呢。

においては、“雨”が「不定／未知」、「定／既知」のいずれであるかによって異なる位置を占めている¹⁶⁾。定のものが表現の中心となるということであるから、「存現文」という概念をもうける意味もない。

語順の問題に関してはまた、中国語では時間軸に沿って(＝動きの順序通りに)コトガラを表現する傾向がある点にもふれておかなければならない。例えば、「食事をしに行く」を表わす

(37) 去吃饭

は中国語の傾向に沿っており、“去”、“吃饭”に対する力点の置き方は同程度である(同等の情報である)のに対し、

(38) 吃饭去

は「食事にしよう」を表わし、意味上の力点は“吃饭”にあって“去”はほとんど具体的意味を表わしていない。(38)と同様に、

(39) 唱卡拉OK去

の場合も「歌おう」を表わす表現であり、“唱”の部分が強く意識される。

語順についてはこのほか、いわゆる「数量補語」の位置の問題がある。例えば、

(40) 我打她三次电话了。

の場合には「她→三次→电话」の順序でなければならない。この場合の“三次”を「補語」とよぶことは、述語動詞の直後に置かれる成分が「補語」であるという原則に反するため、「数量目的語」とよぶのがふさわしい¹⁷⁾。

筆者のコメント

時間軸に沿ってコトガラを表現する傾向のある中国語において、その傾向に反する(38)、(39)のような語順がとられるのは、目的となる動作をとりたてるという話者の表現意図によるものであろう(ちなみにネイティブ・チェックでは、(37)の“去”は動作で“吃饭”は目的であるのに対し、(38)の“去”は「今いる所から離れる」という移動の方向を表わす補語とされた)。一方、どのような語順をとるかということには情報構造の問題が関わることも多く、旧情報から新情報へというコミュニケーションの流れに沿って表現されるのが原則である¹⁸⁾。この点は数量を表わす成分と目的語の位置関係についても同様であると思われ、目的語が名詞の場合には

(41) 他吃过两次北京烤鸭。

(彼は北京ダックを二度食べたことがある。)

(張・佐藤・内田 1997:83)

のように「動詞＋数量を表わす成分＋目的語」の語順をとるのに対し、目的語が人称代名詞の場合には

(42) 我找过他几次。

のように「動詞＋目的語(代名詞)＋数量を表わす成分」の語順をとることとなる。(42)においては「定／既知」の目的語“他”が“几次”の前に置かれており、旧情報から新情報へという情報構造の順序に沿っているということができよう¹⁹⁾。これは、例えばフランス語表現の

- (43) Il donne ce cadeau à sa mère.
(彼はそのプレゼントを母にあげる。)
(久松 2011:200)

における目的語“ce cadeau(そのプレゼント)”、“sa mère(彼の母)”を代名詞に置き換えると

- (44) Il **lui** donne ce cadeau.
(彼はそのプレゼントを彼女にあげる。)
(同上)
- (44)' Il **le** donne à sa mère.
(彼はそれを母にあげる。)(同上)
- (44)" Il **le lui** donne.
(彼はそれを彼女にあげる。)(同上)

のように動詞の前に移る現象に通じるものであり、代名詞で表わされる「定／既知」の情報を先に伝えるというコミュニケーションの自然な流れに沿ったものである²⁰⁾。

2 動詞、補語をめぐる問題

動詞を論じるのに、そもそもどこまでが動詞であるのかを確定できないのが中国語であり、このことが問題となる例として入門・初級段階では、動詞と名詞が同形である“工作”や、形容詞的な性格を帯びた動詞“喜欢”などが登場する。中国語においては、英語や日本語の場合のように動詞の自他を区別することにも限界があり、教科書や辞書では「動詞」と示されるにとどまる。これらのほか、「結果補語」と「可能補語」の関係、可能を表わす助動詞と可能補語の使い分けについても、従来の説明方法に対する再検討が必要である。

2.1 動詞と形容詞

平井講義⑤

中国語では動詞と形容詞を明確に区別することはできない。両者のふるまいに相違があるわけでもない。一般に動詞とされるもの、形容詞とされるものは、

動詞←……………→形容詞
動詞的性格が強い 中間 形容詞的性格が強い

のような図における左右の両極の間のどこかに位置すると考えられる。例えば、“想”、“喜欢”のような心理活動を表わす動詞は、動詞とされながらも形容詞のように“很”の修飾を受けるため、両者の中間に位置すると考えてよい。ちなみに、「兼類」という考え方は、「ある語が本来は特定の品詞に属しており、他の品詞を兼ねる」という発想にもとづくものであるため問題がある。

筆者のコメント

入門段階で登場する“想”、“喜欢”などは、動詞として紹介されながらも、形容詞と同じく程度副詞の修飾を受ける“很想”、“很喜欢”を用いた例がすぐに登場し、学習者を戸惑わせる。一方、買い物に関する会話文でよくお目にかかる

- (45) 再**便宜**一点儿吧！

における“便宜”は、「安い」を意味する場合には形容詞、「安くする」を意味する場合には動詞として辞書などに収録されている。興水 1985:153、187 の記述にみられるように、動詞と形容詞を分けずに一つの品詞とする考え方や、形容詞という品詞を立てずに動詞の一種とする考え方がとられることがあるのは、両者の境界を明確に線引きできないからである。“想／喜欢”および“便宜”は、それぞれ典型的動詞、典型的形容詞から離れたところに位置づけられるものであり、動詞と形容詞の連続性が観察されるケースとして最初から紹介する方がよいように思われる。(45)の“便宜”がインフォーマントの直感では形容詞と判断された点や、同:155 が、形容詞は賓語をとらないものの、(45)の“一点儿”のような“准宾语(準賓語——時間量・動作量・数量などを表わす)”をとることができるとしている点からみても、様々な語についてそれらが動詞としてのふるまい、形容詞としてのふるまいのいずれがまさっているかによって、動詞としての性格がより強いもの、形容詞としての性格がより強いものというような相対的な位置づけをしつつ学習者に理解させていく方が、長期的な教育において意味のあることと思われる。

2.2 動詞の自他の問題

平井講義⑥

中国語の動詞について“及物動詞”、“不及物動詞”のような区別をすることは意味がない(これに対し、日本語の「有対動詞」は研究対象としては面白い)し、そもそも区別することは不可能である。中国語話者にとっては、日本語の自動詞、他動詞の区別を理解することは難しい。

中国語には“打碎”のような“打-”形式の表現が存在する。同形式が用いられるようになったのは、時代が下るにつれて言語で細かく表現する必要が出てきたことによる二音節語化の結果である。“打碎”は意志的な動作に限らず、例えば「物を誤って落として割ってしまった」という場合にも使用可能である。“打-”形式の表現の中には、動詞性が強いものから弱いものまでが含まれる一方、“打开”のような離合詞であるもの、“打听”のような離合詞でないものがある。近代以後の二音節語化の例としてはこのほか、“看→看见”、“听→听见”のようなものが挙げられる。ちなみに、「動詞+目的語」の組み合わせに様々なタイプがあるのは、中国語動詞に自他の区別がないことと深く関わっている。

筆者のコメント

『中日大辞典(“打”、“碎”、“开”の項)』では“打碎”は「打ち砕く」、「碎」は「砕く(ける)」と示され、“打开”は「開ける」、「开」は「あく(ける)」と示されており、“打-”によって自動詞が他動詞化されるとは言い難いということがみてとれる。このことは、大河内 1973 : 63 が

(46) 开了门。(大河内 1973 : 63)

は「戸をあけた」のか「戸があいた」のかを明確にするため、前者の意味では“打-”を補って

(47) 打开了门。(同上)

とされることがあるとしていることとも符合する。“打碎”、“打开”の意味構造は「働きかけ(動作の過程)——結果」とみることができるが、働きかけが具体的にどのようなものであるかは不明であり、“打-”は結果を生ぜしめるための(有意志 or 無意志の)働きかけをとまなうことを明示する形式となっている。

“打听(たずねる)”も“打开”の場合と同じく、働きかけをとまなうことが“听”に比べて明確となっている。“打-”形式をとる成分の中には、平井教授も指摘されるように離合詞であるもの、離合詞でないものがあり、語彙レベルの現象としてあつかわれていることがみてとれる。

一方、日本語の「砕く／砕ける」、「開ける(あける)／開く(あく)」は他動詞、自動詞のペアを形成しており、文法レベルで論じることが可能であるが、「ひらく」のように自他同形のものもある(英語の“open”も「開ける(あける)」、「開く(あく)」のいずれを表わすことも可能)。このことは、ある言語の動詞すべてにわたり自他が区別されているわけではないことを示している。但し、中国語の“打-”に比べれば、日本語における自動詞に対する他動詞の対応はその普遍性においてまさっていると言うことができよう。ちなみにフランス語には、対応する他動詞が存在しない“tomber(落ちる)”のような自動詞に対して“faire/laisser tomber(落とす)”のように使役形式を用いて他動詞化する方法がある²¹⁾。“faire”、“laisser”はそれぞれ「する」、「放っておく」を表わす動詞であり、“faire/laisser+不定詞”の形で「～(サ)セル／(サ)セテオク」に相当する使役形式を構成するのであるが²²⁾、この形式を他動詞化の手段として用いるのである。“faire+不定詞”によって他動詞化されたものの中には、他動詞、自動詞のいずれとしても働く動詞“cuire(焼く・煮る／焼ける・煮える)”を用いた“faire cuire(焼く・煮る)”のようなものもあり²³⁾、結果を生ぜしめるための積極的な働きかけをとまなうことを明示する形式である点において中国語の“打开”と共通している。

“打-”の場合とは異なり、“-见”は感覚動詞に後置されて無意志動詞化する効果を有し、平井教授は

| | |
|--------------|-------------|
| “看” — look | “看见” — see |
| “听” — listen | “听见” — hear |

のように示されている。“听”は“打听”、“听见”のように“打-”、“-见”のいずれとも結びつく。“-见”が非感覚動詞に後置されるケースとしては“找见”が挙げられるものの、“-见”と結びつく動詞は極めて限られている²⁴⁾ため、自動詞化のマーカースとして普遍性を有しているとは言い難い。

2.3 結果補語について

平井講義⑦

中国語には、動作が開始した後のある途中までを表わす動詞が多く、言語表現として完結させるための様々な「補語」が存在するのであるが、「動詞＋補語」のピンインは続けて表記されるため、例えば“听懂”に“得(de)／不(bu)”が挿入されたものが“听得／不懂”であるという説明は不適切である。また、“听懂”は「動詞＋結果補語」とされるものの、結果補語の中には、“写完”に対する「書き終わる／終える」のように、対応する日本語表現において動詞の接尾語的成分(or 補助動詞)となっているもの²⁵⁾、“学好”に対する「しっかり学ぶ」のように連用修飾成分となっているものがあり、必ずしも「結果」を表わしてはいない。これらを結果補語としてひとくくりにするのはいかなるものであろうか。また、上記の“听懂”と“听得／不懂”にみられるように、結果補語と可能補語は連動していないため、両者を並べてとり上げ説明するのは不適切である。

筆者のコメント

中国語文法における「補語」は、「動詞あるいは形容詞の後ろに置かれてその意味を補足説明する」成分とされるが、これは漠然とした定義である²⁶⁾。「結果補語」についても同様に、「動作の結果を補足説明する」働きを有するとされるが、「結果」という用語の概念も漠然としたものであり、平井教授は「結果補語」というよび方をすべきではないとする。結果補語は、教科書では“听懂”、“写完”、“收到”のような「動詞＋動詞」の組み合わせと、“走累”、“学好”、“来晚”のような「動詞＋形容詞」の組み合わせに分けて紹介されることが多い。一方で、「動詞＋結果補語」構造とされる成分には、“做完”、“抓住”、“睡着(zháo)”のように意味的な重点が前項にあるもの(主要部前項型)と、“推醒”、“走累”のように意味的な重点が後項にあるもの(主要部後項型)がみられることもよく知られている²⁷⁾。前者の中には1.1でふれた“V到/着(zháo)/上”のようなものも含まれるが、“-到/着(zháo)/上”の意味は高度に抽象化されている。“V到/着(zháo)/上”については成戸2014の第I部第1～2章でとり上げ、Vが客体に働きかける「動作の過程段階」を表わすのに対し、“-到/着(zháo)/上”は相互に使い分けがなされつつも「動作の完結段階」を表わすとした²⁸⁾。このことは、結果

(完結段階)までもがその意味範囲に含まれる日本語動詞とは異なって、中国語動詞の場合には動作の過程に比重が置かれる(この点については“看”、“見る”を比較すれば理解しやすい)ということと表裏一体をなしている。このように、結果補語とされる成分の中にはその意味が高度に抽象化され、機能語に準じる働きをするものも含まれているため、こういった様々なタイプのものを一括してあつかうことは、言語現象の分析としては厳密性に欠ける。ちなみに、「動詞＋結果補語」とされるもののうち、“准备好”のような二音節動詞と結果補語の組み合わせにおいてはそれぞれの意味が明確に識別できるのに対し、一音節動詞と組み合わせられた場合には必ずしもそうではなく、“感到”のように一語とされるものさえある²⁹⁾。二つの成分の結びつきの強さという点からも、教育現場での慎重なあつかいが求められる。

2.4 助動詞と可能補語

平井講義⑧

可能を表わすには、“会”、“能”、“可以”などの助動詞を用いる方法と、“V得／不R”形式のいわゆる可能補語を用いる方法があるとされる。“会”、“能”、“可以”の使い分けは以下の通りである。

“会”——練習・訓練によって修得される技能・技量があって「～できる」

“能”——能力・条件が備わっていて「～できる」

“可以”——「～することが許される」からの拡張義としての「～できる」

“可以”は「許されるか否か」を問題とするものであって形容詞的な性格を有しており(この点については成戸2019b:111、同2022:93でもふれている)、様々な文法書において「可能的助動詞」として紹介されていることには疑問を抱かざるを得ない。一方、“会”と“能”を比較すると、例えば

(48) 他会说英语吗?

は単にできるかできないかを問題にしているのに対し、

(48) 他**能**说英语吗？

は相当できる（“会”の場合よりもレベルが高い）ことを前提としているという相違がみられるほか、

(49) *他会游五百米。

(49) 他**能**游五百米。

(50) *我一分钟**会**打六十个字。

(50) 我一分钟**能**打六十个字。

のような数量補語（平井教授は「数量目的語」とする）をとともなう場合や

(51) *我会听懂英语。

(51) 我**能**听懂英语。

のような結果補語をとともなう場合には、“能”を用いることはできるが“会”を用いることはできない。

一方、日本語における可能表現は、いわゆる可能動詞や「V(ラ)レル」、「(Vスルコト)ガデキル」などの形式をもつものに限られ、

(52) 肩が痛くて手が上がらない。

(53) 荷台が高くて荷物が載らない。

(54) このドアは開かない。

のような自動詞表現は可能表現とはされないのが一般的であるものの、実際にはこれらは可能表現とみてよい性質のものである。(52)の「手が上がらない」は「手が上げラレナイ」、「手を上げるコトガデキナイ」と等価であり³⁰⁾、(53)の「荷物が載らない」は「荷物が載セラレナイ」、「荷物を載せるコトガデキナイ」と等価である。(54)の場合も同様であり、「開かない」は「開けラレナイ」、「開けるコトガデキナイ」と等価である。「上がらない」、「載らない」、「開かない」には可能の意味が含まれているのである。自動詞による可能表現には否定形を用いるのが一般的であり、90%以上は否定形である。この点で、中国語の可能補語が“V不R”を通常の形としていることに通じるものがある³¹⁾。「V(ラ)レル」、「(Vスルコト)ガデキル」の場合とは異なり、自動詞表現が表わす可能の意味は、日本語話者でない者には理解しにくい。ちなみに、(53)の「載らない」は、中国語では“搬不上”のような“V不R”形式によっ

て表現されることとなる。

“V得／不R”表現においては、ある事態・状況を実現させようと働きかけた結果、その事態・状況が実現できた場合には肯定形が、実現できなかった場合には否定形が用いられる。このことは、例えば

(55) 他讲的广东话，我**不能**听懂。

は単に「わからない」という客観的・一般的なコトガラを表わすのに対し、

(55) 他讲的广东话，我听不懂。

は「聞いているが、どんなに聞いてもわからない」という個別のコトガラを表わすという形であられる³²⁾。また、

(56) *书架已经满了，这几本书**不能**放。

は成立しないのに対し、

(56) 书架已经满了，这几本书放**不下**。

は「何とか入れたいが、どんなに入れようとしても入らない」を表わす表現として成立する。助動詞を用いると客観的・一般的なコトガラを表わすこととなるため、

(57) 鲜肉，**不能**久放。

は“鲜肉”のもっている性質を表わす表現、すなわち「属性可能＝無情物の性質としての可能」を表わす表現となる（属性可能については成戸 2022 でとり上げている ※筆者補足）。

筆者のコメント

助動詞“会”、“能”を用いた表現の中には、いずれを用いることも可能でありその使い分けが問題となる(48)、(48)’のようなケースが存在し、平井講義では“能”を用いた(48)’の方がレベルの高いことを前提としていたとされた。また、

(58) 他会喝酒。

(58) 他**能**喝酒。

の場合、“会”を用いた(58)は「酒席での付き合いが

上手である」というニュアンスを含んでいる点で「能力」について述べている(58)’とは異なり、「技能・技量」を問題とする“会”の特徴がみてとれる³³⁾。但し、このような相違は“会”、“能”を直接に比較して「どのような相違があるか」と聞かれた場合にネイティヴが思いうかべる場面をもととした微妙なニュアンスの相違であることが多く、両者のいずれを用いても大きな相違がないケースは少なくないと思われる³⁴⁾。(48)、(48)’あるいは(58)、(58)’にみられる“会”、“能”の使い分けは、客観的には同一の「英語が話せる」、「酒が飲める」という状態(「可能」は状態の一種である)を「技能・技量」、「能力」いずれの側面からとらえるかの相違であり、日本語ではこのような区別がなされない。「技能・技量」を問題とすることは、「そのような技能・技量を備えているか」すなわち「できるかできないか」というレベルの話としてなされることにつながるのに対し、「能力」を問題とすることは「できるかできないか」を越えて「どの程度できるのか」というレベルの話としてなされることにつながるようであり、このことは、(58)’と同じく“能”を用いた

(59) 她能喝。(彼女は飲める。)

が日本語の「飲める」と同じく単に飲めるという意味にとどまらず「よく飲める(=酒量が多い)」を表わすことが可能な点や、“能干”が日本語の「できる」と同様に「才能がある、仕事がよくできる(『中日大辞典』“能”の項)」を表わすことによっても理解できよう。「できるかできないか」というレベルを越えた能力を表わす“能”の特徴が顕在化したケースが(49)’、(50)’のようないわゆる数量補語(数量目的語)をとこなう表現例であり、「できる」という前提で「どの程度できるか」を具体的に述べているのである。

ちなみにフランス語には、中国語の“会”に似た可能を表わす助動詞“savoir”が存在する。“savoir”は「知っている」を表わす動詞としても用いられ、“savoir+不定詞”の形で「～することができる」を表わす。可能の助動詞としては他に“pouvoir”があり、“pouvoir+不定詞”の形で同じく「～することができる」を表わす。“savoir+不定詞”と“pouvoir+不定詞”の相違について、久松 2002:70-71 には、前者は「生来、または学習・訓練による能力があつてできる」という意味で用いられるのに対し、後者

は「個々の場面で、できるかできないかを問題にする」場合に用いられる旨の記述がみられ、

(60) Je **sais** nager, mais je ne **peux** pas nager aujourd' hui.

([普段は]泳げますが、[体の不調などで]今日は泳げません。)(久松 2002:71)

のような表現例が挙げられている(この点については成戸 2019 a :60-62 でもふれた)。成戸 2019 b :111 で紹介したように、大河内 1997:137 には、中国語の可能の助動詞の中心は“能”であり、“会”、“可以”は他に主たる働きがあると考えるのが合理的である旨の記述がみられるが、フランス語の“savoir”、“pouvoir”についてはどうであろうか。この点に着目して“savoir”、“pouvoir”の使い分けを“会”、“能”のそれと比較することにより、両言語における可能表現の新たな側面が見えてくる可能性もある。

平井講義では、自動詞(の否定形)を用いた日本語表現の中には、可能表現と認められるものがあるとされた。自動詞自体には可能を表わす形式上の特徴はないものの、場面や文脈によっては可能の意味が読みとれるケースがあるということである。この点は、中国語の「動詞+結果補語」が可能を表わす形式としての性格を有することに通じるように思われる。成戸 2014:28-29 では、「動詞+結果補語/方向補語」を、「動詞+得/不+結果補語/方向補語」とともに可能表現の系列を構成する形式の一つに位置づける大河内 1980(同 1997:135-148 に収録)、杉村 1988 の考え方を紹介した。可能を表わす働きは必ずしも可能を表わす形式によってになわれるとは限らないようである。中国語の教科書によく登場する“听懂”、“听得懂”を例にとれば、いずれに対しても「聞いてわかる」という日本語が対応する。「わかる」は「理解できる」と同義であるため可能の意味が内包されているとみてさしつかえないのであるが、問題は“听懂”の方である。“听懂”、“听得懂”の相違および“听不懂”との関係を説明するに際して

听懂 — 聞いてわかる(事実のみを表わす)

听得懂 — 聞いてわかるコトガデキル

听不懂 — 聞いてわかるコトガデキナイ

という便宜的な対応例をもち出すことも考えられないではないが、それでは理論的な説明にならない。

「動詞＋結果補語／方向補語」と「動詞＋不＋結果補語／方向補語」の間には可能、不可能の対応関係が存在し、「動詞＋得＋結果補語／方向補語」は強意の可能形式であるという大河内 1980:66-70(=同 1997:141-144)の見方が存在することや、可能補語形式に用いられる“得”、“不”が意味的に肯定・否定の対をなしていない点、使用頻度における差異が大きい点などから両者を挿入辞であるとする見方に疑問を呈している杉村 1988:215 の記述がみられる³⁵⁾ ことなどを考えれば、少なくとも中級以上のクラスにおいては、“听懂”のような「動詞＋結果補語」形式の成分にも可能の意味が内包される点に言及してもよいように思われる。このことは、結果補語と可能補語を連動するものとしてとり上げることに対して否定的な平井講義⑦の内容とは相容れないようにもみえる。しかしながら、「動詞＋結果補語／方向補語」を可能表現の系列を構成する形式と位置づけることに一定の合理性がみられる点、非可能形式である自動詞を用いた日本語表現の中に可能を表わすケースが認められる点に鑑みれば、二つの立場の間で整合性をとりつつ理論構築をしていくことは不可能ではないと考えられる。

3 文をめぐる問題

平井講義では文レベルの様々な問題も紹介されたが、本稿では疑問文に関する問題、聞き手に配慮した表現の問題、“前置詞・N＋V”表現における“不／没”の位置の問題をとり上げる。

3.1 諾否疑問文と反復疑問文

平井講義⑨

「～ですか」という疑問文は文末を上げるイントネーションによるものが基本であり、このような現象は様々な言語にみられる。「～ですか」を表わす疑問文の原型は、例えば

(61) A: 去? B: 去。

のようなものである。教科書では疑問文の説明において

(62) 他是学生吗?

のような諾否疑問文と

(62)' 他是不是学生?

のような反復疑問文を紹介するのが通例であるものの、前者は意味上の特徴を、後者は形式上の特徴を表わす名称であるため、整合性を欠いている。(62)と(62)'の相違について教科書でふれられることはほとんどないが、(62)は「彼が学生であるかどうかについて全く知らない」というニュアンスを帯びた表現であるのに対し、(62)'は(62)よりも婉曲な言い方であると同時に、「学生であるかどうか」を確認するようなニュアンスを帯びている。一方、“不是”が文末に置かれた

(62)" 他是学生不是?

は(62)'よりも確認の度合いがさらに強い表現である。動作動詞を用いた場合も同様であり、

(63) 你喝不喝酒? (63)' 你喝酒不喝?

の二通りが成立する。いわゆる反復疑問文をとり上げる場合には両方を示し、その違いに言及すべきであろう。

筆者のコメント

否定形を文末に置く(62)"が(62)'よりも確認の度合いが強いということは、話者が“他”について「おそらく学生なのだろう」と思っている可能性が高いということであり、(62)"は

(64) 他是学生吧。

に近い内容の表現であると推察され、そうであれば、(62)→(62)'→(62)"の順で話者があらかじめもっている“他”についての情報量が多くなっていくこととなる。但し、“吧”を用いた表現にも幅があり、(64)の文末を上昇調にした

(64)' 他是学生吧?

のようなケースもみられる。このようなケースについても通常は教科書でとり上げられることがあまりないが³⁶⁾、平井教授が指摘された疑問文の基本に関

わる重要な点である。

「～ですか」を表わす疑問文に「なぜ語気助詞が使用されるのか」については、同じく語気助詞である“啊”、“呀”などと比較して理解しにくさを感じる初学者も少なくないと思われる。文末を上げるイントネーション(rising intonation)は、「情報がさらに続く」というニュアンスを含むことがしばしばであり、疑問文の場合には「相手からの情報(返事)を待つ」のであるから、やはり「続く」わけである³⁷⁾。形式上は肯定文であるものが文末を上げることによって「～ですか」を表わす現象は、日本語や英語、フランス語にもみられる。ちなみにフランス語においては、「～ですか」を表わす疑問文のタイプとして、肯定文と同じ表現の文末を上昇調に読む

(65) Vous êtes français?
(あなたはフランス人ですか。)

のようなものがあり、文頭に“est-ce que”をつけた

(65)' Est-ce que vous êtes français?
(あなたはフランス人ですか。)

や主語と動詞を倒置した

(65)” Etes-vous français?
(あなたはフランス人ですか。)

とともに疑問文の3つのタイプとされている。久松 2011:125 には、主語と動詞が倒置された疑問文に関する

- ①主語と動詞が倒置された形は、通常の文(平叙文)に比べると不安定・未完結なものである。
- ②このため、これを投げかけられた相手は安定的な文の形状に戻す操作をして「返事」をすることとなる。
- ③文尾のイントネーションを上げて発音されるのも、疑問文の不安定感をかもし出す作用から必然のリズムである。

という旨の記述がみられる。肯定文の末尾を上げて

相手にたずねる(65)のようなケースは③のみによるものであるが、フランス語では疑問文の一つのタイプとして他の二者と同等の地位を占めているのである。

一方、例えば

(66) 我去北京, 你呢? — 去上海。
(私は北京に行くけど、あなたは? — 上海に行きます。)(加納ほか 1991:30)

(67) 你喝点儿什么呢? — 乌龙茶。
(あなたは何を飲みますか。 — ウーロン茶です。)(同上) ※いずれも日本語訳は筆者

のような中国語の疑問文の場合、文末の上昇イントネーションと語気助詞“呢”によって「話がまだ続く→相手の返事待ち」というニュアンスが示される。また、神田 1989:29-30 には、「未然」を表わす“呢”の本来の働きが、「動作が未完成であること」すなわち「動作が終わっていない→継続中である」ことから進行に解釈することも可能である旨の記述がみられ³⁸⁾、「未然～未完成」の連続性に着目して非進行表現、進行表現における“呢”の働きの連続性を説明しようとしている。このような連続性を端的に表わすのが

(68) 你看什么书呢? — 《西游记》。
(加納ほか 1991:39)

のようなケースである。動詞が“(一)点儿”をともなっている(67)の“你喝点儿什么呢?”とは異なり、(68)の“你看什么书呢?”は「あなたは何を読みますか」、「あなたは何を読んでいますか」のいずれを表わすことも可能であり、前者の内容を表わす場合には「相手の返事待ち」のニュアンスが、後者の内容を表わす場合には「発話時(に進行中)のコトガラであること」および「相手の返事待ち」のニュアンスが“呢”によって示されることとなる。

3.2 聞き手に配慮したやわらかい表現

平井講義⑩

動詞に後置される“(一)点儿”は、形容詞に後置される場合や“有(一)点儿+形容詞”形式の場合とは異なり、「少し、わずか」という具体的意味に乏し

い。そのような具体的意味を表わすのではなく、婉曲表現による依頼などのように、コミュニケーションを円滑に遂行するための表現（＝聞き手に配慮したやわらかい表現）とする効果を果たしているのである。例えば

(69) 买点儿酒菜了。

は“(一)点儿”がなければ恩着せがましい言い方となり、

(70) A：多吃一点儿啊。 B：谢谢。

におけるAの発話を

(71) 多吃!

とすれば「たくさん食え!」の意味となる。“（一）些”にも同様の効果があり、

(72) 多穿些衣服。

は“(一)些”が用いられることにより婉曲な表現となっている。“一下(儿)”も、例えば

(73) 我来安排一下儿。

において「(時間的な)少し、わずか」を意味するとは限らず、動詞の重ね型“V(一)V”の働きも、

(74) 给我看(見せろ)

に対する

(74) 给我看看(見せてみて)

のような聞き手に配慮した表現とすることである。教科書にしばしば登場する

(75) 有空来我房间坐坐。

のような表現の“坐坐”も短時間の動作を表わしてはいない。但し、“V了(一)V”形式の

(76) 看了一眼

は「よく見た」を表わす。

筆者のコメント

通常のコミュニケーションに際しては、聞き手の感情を害さないような言語上の配慮が必要であることは言うまでもない。“V(一)点儿”、“V(一)些”、“V一下(儿)”、あるいは“V(一)V”に対しては、「ちょっと～する(～してみる)」などの日本語を対応させることが多いが、「ちょっと」も具体的意味を表わすだけではなく、聞き手に配慮するがために用いられることがしばしばである。人に何かを依頼したり誘ったりするためのこのような表現には、中国語、日本語のいずれにおいても、具体的意味を表わす働き、聞き手に配慮した表現とする働きが明確に区別できるケースばかりではなく、いずれかの働きがまざっているケースも多いと思われる。但し、上記の中国語諸形式に対しては必ずしも日本語の「ちょっと～する(～してみる)」が対応するとは限らず、このことは

(77) 你喝点儿什么吗? — 喝。

／何か飲みますか。— はい(いただきます)。

(加納ほか 1991:64) ※日本語訳は筆者

(78) A：学校后边有个自由市场。你不去买点儿什么吗?

／学校の裏に自由市場があります。何か買いに行きませんか。

B：我想买点儿水果。

／果物デモ買いたいですね。

A：那去看看有什么水果。

／それならどんな果物があるか見に行きましょう。

(同上:63) ※日本語訳は筆者

のような対応例が許容されることからみてもとれよう³⁹⁾。

一方、聞き手に対する配慮を必要としない場面としては、親しい(or 目下の)相手に対して(71)を用いるケースや、時間が押し迫っている時に

(79) 快走! (はやく行こう!／はやく行け!)

と言うケース、さらには母親が子供をせかして

(80) 快吃! (はやく食べなさい!)

と言うようなケースが挙げられる。

また、日本語では

(81) 飯**デモ**食うか。／飯**デモ**食おう。

のような「**デモ**」を使った言い方をよくする((78)におけるBの発話の日本語訳にも含まれており、Aの「何か買いに行きませんか」も「買い物に**デモ**行きませんか」と言い換えることができる)。この「**デモ**」は「**ヲ**」と交替可能であるが、ストレートな印象を与えることを避けた、いわばぼかした表現とすることで聞き手が誘いを受け入れやすいようにしているともみることができよう。ちなみに、(81)は独り言として用いられることもある。中国語にも同様のケースがみられ、例えば

(82) 买点**儿**咸菜…。

は、学食で一人食事をしていた学生がこのようにつぶやいて席を立ち、窓口に買いに行くという場面での発話であり、独り言であるため聞き手は存在せず、「**点儿**」は日本語の

(82)' 漬物**デモ**買ってこよう…。

における「**デモ**」に相当するとみることが可能である。

3.3 前置詞句を用いた動詞表現の否定形

平井講義⑩

“前置詞・N+V”表現の否定形では、否定の“不／没”は前置詞の前に置かれるというのが教科書の説明であるが、実際にはそれにあてはまらないケースが存在する。例えば、

(83) 我用汉语**不**说。

が自然な表現として成立するほか、

(84) *我坐地铁**不**去。

は通常は不成立とされるものの、「(地下鉄以外の)

他の手段でなら行く」ことを前提とするのであれば成立する。

筆者のコメント

前置詞句を用いた動詞表現における“不／没”の位置については成戸 2009:16-17 でとり上げ、

不／没+在・トコロ+V

在・トコロ+不／没+V

がいずれも成立可能であることを述べた。例えば、

(85) 我**不／没**在家里吃早饭。(成戸 2009:16)

は「私は(別の場所では朝食を食べる／食べたが)家では朝食を食べない／食べなかった」を表わす表現として、

(85)' 我在家里**不／没**吃早饭。(同上)

は「私は家で(昼食・夕食は食べる／食べたが)朝食は食べない／食べなかった」を表わす表現としてそれぞれ成立する。一方、

(86) 他**不／没**用筷子吃饭。(成戸 2009:17)

(86)' *他用筷子**不／没**吃饭。(同上)

の場合には“不／没”の位置が“用筷子”の前に限定され、この相違は“在”が示すところ、“用”が示す手段が、コトガラの成立に直接的に関わるメンバーであるか否かに起因するとした。この点からみると(83)は不成立と判断せざるを得ないのであるが、ある表現が成立するか否かの判断は微妙にゆれることがめずらしくなく、話者の出身地や年齢などによっても異なる。また、平井教授も指摘されるように、ネイティブ・チェックにおいては、表現から具体的な場面が想定できれば「成立可能」の判断が、想定できなければ「不成立」の判断が下されるという点で印欧諸語とは異なる上、これらの判断自体が不安定なものであるケースもめずらしくないため、慎重なあつかいが求められる。

4 アスペクトをめぐる問題

アスペクトを表わすとされている成分の中には、アスペクト形式であるとは断定できないもの、アスペクト形式ではないものが含まれている。この点に関しては教育、研究のいずれにおいても見過ごされてきたように思われる。

4.1 進行表現と“呢”、“在”、“-着”

平井講義⑫

動作の進行を表わす形式は、教科書では“(正)在V…(呢)”、“V…呢”と示されることが多いが、“呢”はコトガラに対する話者の心的関わり(モダリティー)を表わす成分であり、話し言葉において用いられるものである。例えば、

(87) 你写什么？

は「何を書くの?」、「何を書いているの?」のいずれを表わすことも可能であり、後者の内容を表わす場合には

(87)′ 你写什么呢？

を用いることも可能である。そもそも中国語の動詞は、進行中の動作を表わす働きを潜在的に有しており⁴⁰⁾、このことは、(87)と同様に

(88) 你打工吗？

が「アルバイトをしますか」、「アルバイトをしていますか」のいずれを表わすことも可能な点にもあらわれている。一方、

(89) 小王，你在干什么呢？

においては、“呢”が用いられることにより婉曲な表現となっているものの、“呢”自身は進行には関わっていない。このように、“呢”は動作の進行を前提とした表現に用いることが可能であるとは言え、それ自身はオールマイティなモダリティーを表わす成分なのである。そもそも中国語の表現は、場面や状況によらなければその意味を確定することができない。

一方、“在V”、“V着(zhe)”では発話者の視点に相違があり、前者においては動きそのものに目が向

けられており、眼前で動作が進行している場合に用いられるのに対し、後者は動きを含めた事態・状況に目が向けられているという相違がみられ⁴¹⁾、前者の例としては

(90) A：她呢？ B：在我的面前。在吃饭。

が、後者の例としては

(91) A：她呢？ B：在隔壁。吃着饭。

が挙げられる(但し(91)のBの場合、ネイティブ・チェックでは“呢”が必要とされた ※筆者補足)。このほか、前者は

(92) 在我的面前她在吃饭。

のように「存在している」という状態が継続していることを表わすのに対し⁴²⁾、後者は

(93) A：她呢？ B：在隔壁吃着饭呢。

のように形容詞的な働きをするという相違がみられる。

筆者のコメント

“呢”は“吗／了／啊／呀／吧”などととともに語気助詞として紹介されるが、進行表現における働きと非進行表現における働きとの関連性にふれた教科書はみあたらない。例えば、

(94) A：她在哪儿？
B：在房间呢。(平井編著 1989：42)

における“呢”と

(95) A：你在做什么呢？
B：在复习功课。(同上)

における“呢”はいずれも発話時のことを表わしており、両者の働きには連続性があると考えられる。(89)における“呢”は、表現をやわらかい感じにする働き、「発話時(に進行中)のコトガラであること」を明示する働きを兼ねている。後者の働きをめぐっては、平井教授の“呢”自身は進行には関わってい

ない」という説明にふれておかなければならない。筆者は、この説明を「“呢”には進行そのものを表わす働きはない」と理解している。“呢”を用いた表現全体が進行中の動作を前提とするケースがあるため、「“呢”が進行を表わす働きをする」という記述がよくみられる。しかし、進行アスペクトマーカと位置づけることが可能な“在”とは異なり、“呢”はモード(モダリティ)の形式である⁴³⁾ため、このような説明は不適切である。

ところで、(90)、(91)を例とした“在V”、“V着”の相違に関する説明については、筆者はまだ十分に理解できないでいる(むしろ逆ではないかとさえ思っている)。というのも、成戸 2009:340-344 および同 2014:414 で述べたように、“V着”を用いた表現は描写性が高いからである((93)の“吃着”について平井教授が「形容詞的な働きをする」とされたのはこの点を指しているのではなかろうか)。(90)、(91)の相違に関する前述の説明の妥当性については、それが“在V”、“V着”の基本的相違のどの部分と関連するのかも含め、さらなる考察が求められる。

また、平井講義では、表現の core に近いものは客観的事実を述べる成分であり、表現の core から遠いものは話者の心的関わりを述べる成分であるという指摘もあった。これによれば、動詞表現のVに後置される“-着”は前者であり、語気助詞“呢”は後者であるということになる。一方、成戸 2009:335 で述べたように、“在V”を用いた表現においてはVを中心とする後続成分全体(語気助詞は除く)が“在”の作用域と考えられるため、表現の core との遠近という点からみれば“呢”と“-着”との中間に位置することとなる。

4.2 “-了”、“-着”について

平井講義⑬

動詞に後置される“-了”を“-着(zhe)”、“-过”とともに時態助詞(or 接尾辞)と位置づけて“了₁”と示し⁴⁴⁾、文末に置かれて事態や状況の変化を表わす“-了”を語気助詞と位置づけて“了₂”と示すことが広く行なわれてきた。しかしながら、“-了₁”、“-着”、“-过”の3者をセットにして「アスペクトを表わす成分である」と説明するのは無理であり、“-了₁”が完了を、“-着”が継続(or 進行、持続)を、“-过”が経験をそれぞれ表わすというのも事実に対する説明である(「完了」、「継続」、「経験」は英文法

における概念を中国語にそのままあてはめたものである)。“V了₁”、“V着”、“V过”のうち、“V了₁”、“V过”はアスペクト形式ととらえてもよいが、“V着”は時間(の流れ)とは関わりが薄いためアスペクト形式であると断定することはできず、むしろそのように断定しない方がよい。

筆者のコメント

動詞に後置される“-了”は動作の完了を表わす(厳密には「動作の完了を明示する」とは限らない。成戸 2009:251-259 では、「誰かが積み上げた結果としてテーブル(机)の上にたくさんの本が存在する」ことを表わす

(96) 在桌子上堆了很多书。

(成戸 2009:251、Li&Thompson1981:396-397)

のような“在・トコロ+V了+モノ”表現を、「テーブル(机)の上にたくさんの本が積み上げられた状態で存在する」ことを表わす

(96)’ 桌子上堆了很多书。(同上)

のような“トコロ+V了+モノ”表現、すなわち代表的存在表現と

(96)” 他在桌子上堆了很多书。(成戸 2009:255)

のような“主体+在・トコロ+V了+モノ(客体)”表現、すなわち代表的動作表現の中間的な性格を有するものと位置づけ、“V了”の部分は、代表的存在表現においては「モノのトコロにおける存在のありようの変化(=出現)」を、代表的動作表現においては「動作の完了」を表わすとし、(96)のようなタイプにおいてはいずれの性格をも有する概念を表わすとした⁴⁵⁾。このような考察結果は、“在・トコロ+V了+モノ”形式をとる(96)は「モノをトコロに存在せしめる動作を行なった主体」が省略された表現であるという Li&Thompson1981:396-397 の指摘をきっかけとしている。この指摘からは、“V了”の働きを一律に「動作の完了を表わす」とする説明には限界があることがみてとれ、どのような表現に用いられるかによって“-了”の完了アスペクトマーカとしての性格に強弱の差異が出てくると考える方が言語の実態に合っていると思われる。ちなみに、(96)’

のような“トコロ+V了+モノ”表現における“-了”を“-着”に置き換えてもトコロにおけるモノの存在について述べた表現である点では変わりがなく、両者の間には意味的な近似性が認められる。“V了”の働きについて上記のように一律に規定することは、この点からみても十分な説得力を有するとは言えない。

一方、“V着”の働きについては成戸 2014:393-394 において以下のように結論づけた。

① “V着”は「持続」という意味的な特徴を有する連続した一つの領域を形成しつつも、動作の持続状態を表わす成分としての性格が強いものから、動作結果の持続状態を表わす成分としての性格が強いもの、さらには存在表現を構成するものまでが階層的に存在する。

② 動作の持続状態を表わす場合の“V着”が表わす概念は、動作が開始された後に存在する動作のあり方そのものであって、「動作によって生じた状態」である点においては動作結果の持続状態と同様であり、開始と終了との間に位置する動作の一過程であり時間の流れと直接的な関わりを有する「進行」とは異なる。このため、動作の持続を表わす“-着”をアスペクトマーカーであると断定することは説得力に欠ける⁴⁶⁾。

さらに、成戸 2009 の第Ⅱ部第5章では、“在・トコロ+V着”表現における“在”が「進行」を、“-着”が「持続」を表わすとして両者の働きについて考察を行ない、同:332 では「進行」、「持続」を区別する先行研究の考え方を紹介した。“-着”の意味は「進行」ではなく「持続」であるとしたのであるが、先行研究の中にはこれらの概念規定が不明確なまま、あるいは誤った概念規定の上で考察を行なっているものが散見される。

4.3 “-了”、“-过”について

平井講義⑭

動詞に後置される“-了”、“-过”は、話者の判断でいずれを用いるかを選択することができる。例えば、昼すぎにAがBの所にやってきて

(97) 吃饭了没有？

と問いかけた場合、Bは

(98) 吃了。(=吃了了。)(98)’ 吃过了。

のいずれかを選択して返答する⁴⁷⁾。話者の認識は、(98)の場合には「食べてからそれほど時間がたっていない」であるのに対し、(98)’の場合には「食べてから時間がたっている」である。同様のことは

(99) A：去了长城没有？ B：去了。

(100) A：那时候去过长城吗？ B：去过。

についてもあてはまり、(99)は、例えば「Bさんは昨日北京旅行から帰って来た」という客観的事実を、(100)は、例えば「Bさんは五年前に北京に行ったことがある」という客観的事実をそれぞれ前提として用いるのがふさわしい。

筆者のコメント

“-了”に対しては「-タ」を対応させて完了を、“-过”に対しては「-タコトガアル」を対応させて経験を表わすと説明されることが多いのであるが、“-过”が経験を表わすという説明が果たして言語事実をどこまで正確に反映しているかについては再考の余地がありそうである。教科書においては、例えば

(101) 昨天我去了北海公园。(平井編著 1989:46)

(102) 五年前我去过中国。(同上)

のような、発話時との時間的遠近を明示する成分(ここでは“昨天”、“五年前”)を含んだ表現とすることで“-了”、“-过”の使い分けを説明する手法がしばしばとられるのであるが、いずれを選択するかが話者の判断にゆだねられている点で変わりはない。このことは、(100)が“那时候”という漠然とした時を表わす(=発話時との時間的遠近が不明確な)成分を含んでいることや、

(103) A：我想去看杂技，你去不去？

B：去，最近没看过。

(平井編著 1989:49)

においては発話時に近いことを明示する“最近”が存在するにもかかわらず“没看过”が用いられてい

ることによっても理解できよう。一方、“-了”、“-过”のいずれを用いるかということが、表現の前提となる客観的事実の相違と連動しているケースもあり、岡部編著 1990:106-107 には、

- (104) 他来了。(彼は来た。彼は来ている。)
(岡部編著 1990:107)

の場合には「発話時に彼がいる可能性がある」のに対し、

- (104)' 他来过。(彼は来たことがある。)(同上)

の場合には「発話時には彼はもういない」という相違がある旨の記述がみられ、このことは(98)、(98)'における話者の認識についての平井教授の見解とも矛盾しない。ついであるが、このような相違が生じるのは“来”が過程を問題としない動詞であることと深く関わっており、“-过”の意味を「終結(or 完結、完了)」⁴⁸⁾、「経験」に分ける考え方につながっているとみることができないであろうか。岡部編著 1990 の記述については、“-了”、“-过”の選択が話者の判断によるということと矛盾するものであるとみるよりは、両者の使い分けが「話者の判断の相違によるケース」から「異なる事実を前提とするケース」に至るまで幅があることを意味しているとみた方が言語実態に合っており、このことの根底には、“-过”が経験を表わす働きを有するという従来の説明の問題点が横たわっていると考えられる。

“-了”、“-过”の使い分けについて学習者が理解しにくいのは、(98)' や

- (105) 他来过了吗? (106) 你吃过饭了吗?

のような両者が共起するケースであろう。この場合、“-了”、“-过”のいずれを選択するかという問題にはならないが、「過去の時点で動作が終結している」ことを表わす点は、“-过了”を用いた(98)' についての「(動作が行なわれてから)時間がたっている」と話者に認識されているという平井教授の指摘とも符合する。“-了”、“-过”が共起する場合の働きは、(105)、(106)を

- (105)' 他来了吗? (106)' 你吃饭了吗?

と比較することによって鮮明となろう。インフォーマントによれば、(105)、(106)は「過去のこと」を表わすのに対し、(105)'、(106)' は(同じく過去のことであっても)発話時直前の出来事をたずねる場合に用いることが可能とされた((105)' は(104)と同じく“他”が現場にいるというニュアンス)。このことは、“-过”、“-了”が共起する場合には出来事が実現したのは過去の特定期間である(=出来事が生じた時点と発話時点との間に時間的な「断絶」がある)のに対し、“-了”の場合には必ずしもそうではなく、動作の結果状態を表わす日本語「-テイル」との対応関係、すなわち“来了 — 来テイル”のような“V了 — Vテイル”の対応関係が成立することからもみてとれるように、発話時点との時間的連続性を含意するケースがあることにつながるのではなかろうか。

ところで、

- (107) 他昨天刚来过, 今天不会来的。
(彼は昨日来たばかりだから、今日は来るはずがない。)

には、動作が行なわれてからまだ時間がそれほどたっていないことを表わす“刚(…したばかり)”が含まれているにもかかわらず“-过”が用いられている。このような表現例からは、“-过”の終結を表わす働き、経験を表わす働きの連続性をみてとることができそうである。(107)において“-了”が使用されていない理由については、孔令達著/森宏子・于康訳 2001:244-245 が、

- (108) 你问过他没有?
(彼に聞いたの。/彼に聞いたことがあるの。)
(孔令達著/森宏子・于康訳 2001:244)

は終結、経験いずれの意味を表わすことも可能である(書き言葉では轻声“-过 guo”で「終結」を表わし、話し言葉では第4声“-过 guò”で「終結」を、轻声で「経験」を表わす。同様の記述は同:236-237にもみられる)、すなわち

- (109) 你是不是已经问过了他了?
(あなたはもう彼に聞いたのでしょうかね。)
(同上)

(109) '你过去是不是曾经问过他？

(あなたはかつて彼に聞いたことがあるの
でしょうね。) (同上:245)

のいずれの内容を表わすこともできるとしていること
や⁴⁹⁾、“没V过”の否定形をとる(103)におけるB
の発話、あるいは

(110) 今年草莓还没上过市呐。

(赵元任著／吕叔湘译 1979:130)

のようなケースが存在することなども参考にして、
“-过”の働きについて再検討を行なう必要がある。
予測される結論としては、“-过”の終結を表わす働
き、経験を表わす働きには肯定形、否定形いずれに
おいてもある程度の幅があるとともに、二つの働き
の間に明確な境界が認められるわけではないという
ことが考えられる。これらの予測は、龚千炎著／森
宏子・于康訳 2000:199-200 が「経験と完了の間には
やはり共通するところがあるので、両者(“过 guo”、
“了”)は前文と後文で呼応して用いられることも
ある。その場合、ほとんど同じ意味を表している」
としていることや、石毓智著／伊藤さとみ・于康訳
2000:220-221 が『“过 guo”の使用は『了 le』と似
ており、異なる語句との共起により、『動作の終了』
を表す場合と『過去にかつてこのような事柄があっ
た』という意味を表す場合の区別がある。しかし、
それらの文法的意味は共通しているだけでなく、使
用条件も同じであるので、『了 le』と同じように、2
つの意味を持つ『过 guo』を1つの実体として見な
すことにする」としていることと符合するのである
が、“-过”が終結を表わす場合には、前述したよう
な“-过了”形式をとるケースが存在することや、経
験を表わす場合の“没V过”とは異なる否定形(“没
(有)V”)をとるケースが存在することとの整合性を
どのように保つかが課題となろう。

終結を表わすとされる“-过”の特徴をみていく場
合に重要なヒントとなるのは、“V过了”における“-
过”の位置づけに関していくつかの異なる見解がみ
られる点である。(105)、(106)に対する否定の返事
としては

(105) ”还没(来)呢。 (106) ”还没(吃)呢。

のようなものが想定され、いわゆる経験の有無を問

題とする“没V过”の形にはならない(この点からみ
れば、(103)、(110)の“-过”は終結よりは経験を表
わす働きの方がまさっているという見方もできそう
である)。このことは、“V过了”がよく言われるよ
うな“-过”、“-了”の連用」などではなく、“V了”
を基本的な枠組みとしていることを意味するのでは
なからうか。“V过了”の構造については、

- ① “-过”を結果補語(结果补语)、“-了”をアス
ペクト助詞(动态助词)とする《实用现代汉语
语法(增订本)》:404 のような分析方法
- ② “-过”をアスペクト助詞(表示动态的助词)、
“-了”を語気助詞(语气助词)とする《现代汉
语八百词(“过”²⁾の項)》のような分析方法
- ③ “-过”、“-了”をともにアスペクト助詞(动态
助词)とし、“-过了”を両者の連用であると認
める孔令達著／森宏子・于康訳 2001:238-239
のような分析方法

などがみられる。上記のように異なる見方がなされ
るのは、「“V过了”における“-过”にどの程度まで
具体的な意味を認めるか」の相違に起因していると
推察される。すなわち、“-过”の語彙的意味をより
強く認めるのであれば「結果補語」と位置づけるこ
ととなり、そうでなければアスペクト助詞と位置づ
けることとなるのであり、いずれの見方をとるかに
よって“-了”の位置づけも異なってくる⁵⁰⁾。“-过”
を「結果補語」とみる場合の根拠としては、張曉鈴
著／原田寿美子・張勤訳 2001:78,82 が動作の完了、
終結を表わす“过”について「この『过 guo』は多
くの場合、『完／終わる』『罢／終わる』などに言い
換えることができる」とした上で、“V过了”を用い
た表現例について『了 le』を省けるのみで、『过 guo』
は省けない。この『过 guo』の実質的な意味は非常
に強く、『完／終わる』の意味とほとんど等しいから
である」、「(“-过”と“-了”)は連続して用いられ
て、終了の意味を強めると考えられる」としている
ことや、同:83、116 に、「動詞—補語型」の合成語
(or 動補構造の動詞やフレーズ)は“-了”と共起す
ることができるが、“-过”とは一般に共起しない(or
共起しにくい)旨の記述がみられることなどが挙げ
られる。他方、音声面からみれば、孔令達著／森宏
子・于康訳 2001:234-236、劉月華著／一木達彦・王

占華訳 2001:123 に、終結を表わす“-過”は第4声、軽声いずれに読まれるケースもある(但し孔令達によれば、終結という意味を強調するとき、終結、経験の“-過”がまったく同じ形式にあらわれ、軽声で読んだのでは経験との見分けがつかなくなってしまうときは第4声)のに対し、経験を表わす“過”の場合は軽声で読まれるにとどまる旨の記述がみられることや、孔令達前掲書が(108)の“-過”について、前述したように話し言葉では声調の有無によって終結、経験が表現し分けられるとしていることから、終結を表わす場合には、経験を表わす場合に比べて語彙的意味をより強くとどめているとみるのが自然であろう。この反面、劉月華前掲書:124 が、“-過”は「動作の完結」にしか着目しないのに対し、“-完”はさらに「動作の及ぶ事物がつきてしまうこと」をも表わすとしていることから、“-完”の語彙的意味が“-過”よりも強いこと、“V過”が“V完”に比べて「主要部前項型」の表現形式としての性格をより強く帯びていることがみてとれそうであり、これらは、孔令達前掲書:241 が「方向補語の“-過”→終結を表わす“-過”→経験を表わす“-過”」のような歴史的変遷があるとしていること、戴耀品著／中川裕三・張勤訳 2001:197 が、“-過”の意味が実質的なものから機能的なものに至る軌跡(trace)を「通過→経過→完了→経験」のように示していることとも符合する⁵¹⁾。

以上のことから、“V过了”における“-過”は、典型的な結果補語とは異なるものの、その性格を一定程度とどめつつ機能語的な性格を帯びた成分(但し、機能語としての性格の強さは経験を表わす場合におよばない)と位置づけるのが言語の実態に合っていると考えられる⁵²⁾。この点は、《現代汉语八百词》(“过”の項)が前掲②のように“-過”をアスペクト助詞と位置づけ、軽声に読まれると示しているにもかかわらず“V过”を“用在动词后, 表示动作完毕。这种‘动+过’也是一种动结式…”として、いることに象徴的にあらわれており、1.1で紹介した平井講義①の『実詞』と『虚詞』は明確に区別できるものではなく、両者の間には連続性があり、いずれの性格がより強いかの点で差異があるに過ぎない、「動詞に後置される“-了/着/过”はいずれも機能語であるという見解が支配的だが、これらとてやはり意味を表わしていることに変わりはない」という主張を裏づけるものとなっている。また、前述したように“V过了”の基本的な枠組みは“V了”で

あると考えられ、同形式における“-過”の位置づけによって“-了”の位置づけも「アスペクト助詞」、「語気助詞」のいずれとされるかが異なり、“-過”を結果補語とみれば“-了”はアスペクト助詞であるという見方を、“-過”をアスペクト助詞とみれば“-了”は語気助詞であるという見方をとらざるを得ない(“-過”、“-了”をいずれもアスペクト助詞とする見方は、“V过了”の基本的な枠組みを“V了”とする考え方とは相容れない)。ちなみに、

(106) 你吃**过**饭了吗?

のようなケースにおける“-了”は動詞に直接付加されているわけではないためアスペクト助詞と位置づける余地はなく、語気助詞とせざるを得ないのであるが、“V过了”の分析にあたっては、このようなケースが存在することとのバランスをとる必要もある。

“V过了”における“-過”をどのように位置づけるべきかという問題は、経験を表わすとされる“-過”のように、機能語(アスペクト助詞)としての性格をより強めたものが並存するだけに複雑となっている。後者は“-了”の場合と同じく軽声に読まれるのに対し、前者は必ずしもそうではない。この点においては、いわゆる「持続」を表わすとされる“-着(zhe)」、「動作の目的達成」を表わすとされる“-着(zháo)”がその働きによって発音を異にする現象よりも慎重な扱いが求められそうである。

5 おわりに

「中国語教師養成講座」における平井教授の講義では、音声、語彙、文法などの各面における現象について、英語や日本語などと比較しながら、中国語固有の特徴にスポットをあてて解説が行なわれることが多かった(音声面については平井 2012 に詳しいのでそちらを参照されたい)。教育の場においては、中国語の諸現象について説明する際に、どの教科書にも載っているようなスタンダードなポイントのとり上げ方、説明方法が優先される。しかし、実際に教えてみると、規範文法(学校文法)の知識だけでは学習者の質問に十分に答えられないことを誰もが経験し、教科書におけるポイントのとり上げ方(何をどのような順序でとり上げるか)、様々な用語や概念、収録されている例文などについて、それらが適切か否

かの判断を求められることとなる。平井教授も言われるように、成人に対する教育であるから、学習者の「なぜ?」という疑問に答えられなければならない。また、国内での中国語教育は、英語を学んだ経験をもつ日本語話者を対象として行なわれることが多いため、言語を専門とする学部生・院生を対象とするか否かを問わず、英語や日本語にみられる現象と比較してそれらとの違いを理解させながらすすめる必要がある。他方、中国語にも他言語にみられると同様(or 類似)の現象が観察されることがあり、それらについて知っておくことは中国語の正しい理解や運用につながるとともに、言語を専門とする者にとっては、個別の言語の枠を超えた諸現象の分析・解明につながるのである。

注

- 1)《現代汉语八百词》(“用”の項)は前者の見方を、《現代汉语虚词例释》:499は後者の見方をとる。この点については、成戸 2017a の注 35 でもふれた。
 - 2)“給・N+V”表現における“給”についても同様のことがあてはまり、語彙的意味の強弱の差異がみられる。この点については成戸 2015:79-80 で述べた。
 - 3)興水 1985:7 は、主語は「話題」、述語は話題に対する「説明」であればよいので、必ずしも「動作主+動作」に置き換えられないとしている。この点については、さらに『現代中国語総説』:283 を参照。大河内 1973:48 は「主題」というべきであるとしている。中国語における「主語」および「題目」、「話題」、「主題」の概念については、さらに同:53-60、同 1997:129-132、山岸 1965、藤堂 1968:334-335 を参照。成戸 2022 の注 3 でもふれている。
 - 4)張麟声 2001:214 は中国語の主題化の特徴として、①構文的にはその部分を文頭にもってくる、②音声的にはその部分とそのあとに続く部分との間にポーズがあること、を挙げている。これらの点については、成戸 2022:99 でも紹介している。
 - 5)英語の“I”は、①「私」という Lexical meaning(辞書的意味)、②主格という Grammatical meaning(文法的意味)を表わしている。野田 2004:206 によれば、英語は「主題と主語がかなり融合している言語」、中国語は「主題と主語が比較的分離している言語」、日本語は「主題と主語が分離している言語」ということになる。
 - 6)平井教授によれば、“我那朵花买来了。”も成立可能である。大河内 1997:125 は、“我不喝酒。”の「提前」は一般に“酒我不喝。”であり、“我酒不喝。”の形は対比のような条件が必要である(この点についてはさらに同:131 を参照)が、“得”補語をもつ文では容易に“他球打得很好。”、“他棋下得好。”のような形が成立するとしている。
 - 7)大河内 1997:125、131 には、「目的語の提前」という考え方があてはまりにくいケースについての記述がみられる。これに対し、藤堂 1968:335-336 は、文頭に引き出され
- た名詞は目的格のままであり、“NP₂, NP₁+VP”のようにNP₂(目的語の名詞フレーズ)の後には短いポーズが置かれるとしている(大河内、藤堂の考え方の相違については、『主題+説明』と『意味上の受け身』をとり上げた成戸 2022:96 でも紹介した)。これは、印欧諸語におけるような「主語」という概念は用いないが「格」という概念は残そうとする山岸 1965 の考え方に沿ったものである。
- 8)平井教授によれば、“The book, bought.”は成立する。ちなみに大河内 1997:132 は、“English I speak, but French I d’ont.”においては主語“I”の省略はありえないとしている(成戸 2022 の注 34 でも紹介した)。澤田・中川 2004:22 には中国語、英語における目的語の文頭移動による主題化についての記述がみられ、野田 2004:195、198、204、207 には、英語における主題化が文法的手段(主題を動詞の前に置く)ではなく音声的手段によってなされること、書き言葉ではあまり使われないこと、主語以外の成分が主題になっている文はかなり特殊なものであることが述べられている。英語のトピック構文について論じたものとしては西光 2004 がある。
 - 9)三上 1953:73-82 を参照。三上とは異なり、柴谷 1978 は「主語」という文法範疇を認める。この点については同:177-220 を参照。日本語における「主語」および「題目」、「主題」などの概念については、『新版 日本語教育事典(「主題」の項)』、『日本語学キーワード事典(「主語」の項)』、『日本語教育事典(「文の成分」、「総主」、「主題」、「主語」の項)』、『日本語文法事典(「主題¹」、「主題²」、「主題³」の項)』を参照。成戸 2022 の注 9 でもふれている。
 - 10)成戸 2009 の同教授による序文においてもこのことが言及されており、「発話の場面や状況が異なれば、異なる分析や解釈が可能なもの」が中国語にはめずらしくない。
 - 11)大河内 1997:125 は、“他写字写得很小。”よりは“他字写得很小。”の方がより一般的であるとしている。
 - 12)大河内 1973:48-49、同 1997:115-116 も「意味上の受け身」という考え方に否定的である。
 - 13)注 3 を参照。興水は「意味上は賓語と考えられるものが主語の位置におかれる場合も少なくない」の例として(23)を挙げている。
 - 14)“借”の働きについては成戸 2017b:24 でもふれた。
 - 15)(30)の多義性については成戸 2017b の注 63 でも紹介した。大河内 1973:62 が“去年她生了孩子。”について、「去年彼女は子供を生んだ」と訳されることが多いが「去年彼女に子供ができた」と解することもできるとしていることから、事実指向の中国語の特徴がみてとれる。
 - 16)これらの点については、張・佐藤・内田 1997:145-147、郭春貴 2001:327-329、『日本語文法事典(「定・不定」の項)』を参照。ちなみに、村木 1989:186-187 では、「場所」は「ヒト>生物>モノ>事象>場所」に示されるように表現の中心としていわゆる主格や主語になる傾向が最も弱いとされる。
 - 17)この点は『現代中国語総説』:295-296 の見方と同様である。但し同書は、名量詞からなる数量目的語と区別して「準目的語(准宾语)」と位置づけている。ちなみに、(40)は「私は彼女の電話で(=彼女の電話を借りて)三回電話した。」という状況のもとで成立する表現である。

- 18) 情報構造については『応用言語学事典(「情報構造と伝達機能」の項)』、『オックスフォード 言語学事典(「情報構造 information structure」の項)』を参照。
- 19) 張・佐藤・内田 1997:84 は、“他吃过北京烤鸭两次。”を不成立としているが、ネイティブ・チェックでは、使用される場面が限定的ではあるものの非文とはされないという判断であった。(42)に対し、非代名詞を用いた“我找过小王几次。”、“我找过几次小王。”はいずれも成立する。この点については、さらに李臨定著／宮田一郎訳 1993:153-158、張・佐藤・内田 1997:83-84、古川 2001:169-170、郭春貴 2017:112-113などを参照。一方、場所代名詞を用いたケースについては、郭春貴 2017:113 が“我去过那儿两次。”、“我去过两次那儿。”のいずれも成立するとしているものの、ネイティブ・チェックにおいて前者は後者よりも許容度が高いとされ、非代名詞を用いた“我去过一次上海。”、“我去过上海一次。”では後者の使用される場面が限定的とされた。これらのことから、名詞、代名詞の位置については「そのような位置をとる傾向にある」とみるのが正確であろう。
- 20) フランス語動詞表現における代名詞の位置については、久松 2011:200-203 を参照。
- 21) 日本語における自動詞の他動詞化の例としては、例えば「乾く」に対する「乾かす」が挙げられるが、『応用言語学事典(「使役」の項)』は「kawak-as-u(乾かす)」を、「kawak-u(乾く)」における自動詞語幹「kawak」に「-as」という使役の助動詞に似た形がついたものであるとしている。これらの点については、成戸 2018 b :64 でも紹介した。
- 22) フランス語の使役形式については成戸 2018 a、同 2018 b でとり上げた。
- 23) この点については成戸 2018 b :64 でもふれた。
- 24) 感覚動詞に後置される“-見”が無意志動詞化の効果を生じる点については成戸 2014:68 を、“-見”と結びつく動詞が限られている点については同:245 を参照。
- 25) 「-終わる／終える」が補助動詞とされる点については、『研究社 日本語教育事典(「補助動詞(auxiliary verb)」の項)』、『日本語学キーワード事典(「動詞」、「補助用言」の項)』、『日本語教育事典(「補助動詞」、「補助動詞類各説」の項)』などを参照。
- 26) 「補語」という概念のあいまい性については『現代中国語総説』:297 を参照。
- 27) この点については成戸 2014:8-11 で述べた。また、同:99 で述べたように、主要部前項型の表現形式としての性格にも強弱の差異がみられ、“看见、听见、闻见”は“看到、听到、闻到”よりも主要部前項型の表現形式としての性格が弱い。
- 28) 「動作の完結段階」については成戸 2014:11-12、49、53-54、57 を参照。
- 29) この点については、成戸 2014:9-10 でもふれた。大河内 1997:139 は、結果補語は一音節が大多数であり、動詞と補語の選択も半ば固定的結合であるとしている。
- 30) 「手ヲ上げられない」が許容されるか否か、許容されるとみる場合の「手ガ上げられない」との相違については、『日本語学キーワード事典(「動詞」、「ムード」の項)』の記述が参考となろう。村木 1975:123 は、「ぼくは英語ガ／ヲ読める」における「ヲ→ガ」を任意変形とする。大河内 1997 は同:118 において、「字ヲ書く」を可能形にする「字ヲ書ける」ではなく「字ガ書ける」となるとする一方で、同:136 においては「ここでタバコガ吸える」、「ここでタバコヲ吸えるか？」の双方を中国語可能表現に対する日本語訳として用いている。成戸 2020a の注 21 では「万年筆ガ／ヲ見つけられない」、「転勤の希望ガ／ヲかなえられた」を挙げた。
- 31) この点については成戸 2020 a :109 でふれた。自動詞を用いた日本語可能表現については、張威 1998 およびそれをふまえた張麟声 2001:94-98、103-104(成戸 2020 a :109 では張麟声 2001:100-104 として引用した)でとり上げられている。ちなみに、日本語の可能表現は歴史的にみると否定が圧倒的に多数を占めるといわれる。この点については『古典語現代語 助詞助動詞詳説』:71、77(成戸 2020 a の注 30 でも引用)を参照。
- 32) 大河内 1997:144-146、郭春貴 2001:337-340 には助動詞を用いた可能表現と“V得／不R”表現の相違についての記述が(成戸 2020 a :103-104 でもふれた)、大河内 1997:143 には“V不R”が不可能を表わすメカニズムについての記述がそれぞれみられる。
- 33) 張・佐藤・内田 1997:72 は“他很会喝酒。”について「相手に勧めるのが上手、自分は酔わない程度に飲む。実際にはお酒にそれほど強くない可能性もある」とするほか(成戸 2019 b :105 でも紹介した)、“他很会说话。”について「話をする技能がある＝口が上手だ」を表わすとしている。ちなみに“他很能说话。”は「彼はよくしゃべる人で、長時間話し続けても疲れない」というニュアンスを帯びた表現、“那孩子能说话了。(張・佐藤・内田 1997:72)”は「その子は言葉を話せるようになった(＝話をする能力が備わった)」を表わす表現である。
- 34) 大河内 1997:137 は“我的讲义，你能抄下来吗？——可以抄一点。(鲁迅《藤野先生》)”における“能”と“可以”を入れ換えても「文法上さしつかえない」としている。
- 35) これらの点については、“V到”表現を主たる考察対象とする成戸 2014:28-29 でも紹介した。
- 36) 『中国語教科書(下巻)』:391-392 ではとり上げられており、“吧”の働きについて「平叙文を、はっきり断定できない疑問文にかえるものである」としている。疑問を表わす場合に用いられる“吧”については、さらに『現代中国語総説』:349-350、352-353 を参照。
- 37) これらの点については、英語、日本語について述べた三原・高見編 2013:24-26、日本語について述べた『研究社 日本語教育事典(「終助詞(sentence-final particle)」の項)』、『新版 日本語教育事典(「イントネーション」の項)』、『日本語文法事典(「イントネーション」、「カ」の項)』、中国語について述べた『現代中国語総説』:108などを参照。リーディングに特化したフランス語学習書である藤田・ティオリエ 2013:34 が「文末を除き、リズムグループ(意味上のまとまりのある単語グループ)の終わりでは上昇調のイントネーションにする」としているのも同様であろう。
- 38) 『現代中国語総説』:351 も、“呢”は「動作行為がまだ終結していないことを強調する」としている。
- 39) 郭春貴 2001:10-11 には、中国語動詞の重ね型と日本語の

「ちょっと」の相違に起因する中国語学習者の誤用についての記述がみられる。

- 40) 成戸 2020 b :55 で述べたように、“呢”を用いると進行の意味に傾くこととなる。この点についての判断はインフォーマントによって幅があり、(87)は非進行、(87)’は進行、非進行のいずれを表わすことも可能であるものの進行表現としては“呢”を用いる方が better とされるケースもあった。中国語動詞に進行の意味が潜在的に含まれている点については、成戸 2009:299-300 で述べた。
- 41) 平井編著 1989:33 は、“这是外事处，你快去办吧。我在这儿等着。”における“—着”について「動詞によって表わされる状態が一定時間つづく、あるいはつづいているという意味を表わします」としている。
- 42) 但し、成戸 2009:300-303 においては、(92)のようなタイプの表現について、“在・トコロ”の後にポーズを置くと「かろうじて非文とはされない程度の表現として成立するものの、通常の発話において用いられる場合には不自然である」とするとともに、進行を表わす“在・トコロ＋V”表現における“在”の語彙の意味についてふれた。
- 43) この点について、張・佐藤・内田 1997:82 は“在V…呢”表現における“在”、“呢”の働きを比較して簡潔に述べている。“呢”が表わすムードについては、『現代中国語総説』:349-354、成戸 2009:303-304、同 2014:382-383 を参照。「モダリティ」と「ムード」は近似した概念であり、区別されないことがある（筆者は同 2014 の第Ⅱ部第4章で「ムード」という用語を用いた）。この点については、『新版 日本語教育事典（「モダリティ」、「モダリティの研究」の項）』、『日本語学キーワード事典（「ムード」の項）』、『日本語教育事典（「ムード」の項）』、『日本語文法事典（「アスペクチュアリティ」、「ムード」、「モダリティ¹」、「モダリティ²」、「モダリティ³」の項）』などを参照。
- 44) 香坂 1971:323 には、“—了”、“—着”、“—过”を「接辞」とする考え方が、ラテン化新文字運動家が語を続書きするにあたり、これらを実詞類の「語形変化」の中に組み込んだ時に始まったことが紹介されている。
- 45) Vは、代表的存在表現においては存現動詞、代表的動作表現においては動作動詞、(96)のような表現においては上記のいずれの性格をも有する動詞ということとなる。
- 46) この点に通じる記述が、張・佐藤・内田 1997:82-83、戴耀晶著／中川裕三・張勤訳 2001:179-183 にみられる。「アスペクト」の概念については、『オックスフォード 言語学辞典（「相 aspect」の項）』、『日本語教育事典（「アスペクト」の項）』、『日本語文法事典（「アスペクト¹」、「アスペクト²」の項）』などを参照。
- 47) これらの点については、趙元任著／呂叔湘译 1979:126-127、129、張曉鈴著／原田寿美子・張勤訳 2001:81-82、劉月華著／一木達彦・王占華訳 2001:122、『現代中国語総説』:273 を参照。
- 48) 戴耀晶著／中川裕三・張勤訳 2001:209 には、“李洋去了北京。”の前提となる客観的事実として、「依然として北京にいる」、「北京に行く途中である」が想定される旨の記述がみられる。ちなみに平井教授は、“他来了吗？—来了。／彼は来ましタ（来テイマス）か。—来ましタ（来テイマス）。”のような対応例を示し、中国語において日本語のような形式上の区別がない点について「未分化であ

る」とする。“—过”の意味を表わす用語には「終結」、「完結」、「完了」のようなばらつきがみられるが、“—了”の働きの相違を論じるのであれば「完了」という用語は避けた方がよさそうである。

- 49) これに対し趙元任著／呂叔湘译 1979:129 は、“轻声的‘过’是纯粹后缀，意思是‘过去至少有过一次’”の例として“你吃过鱼翅没有？—吃过。”を挙げ、“你吃过了鱼翅没有？—吃了。／吃过了。”との相違を説明している。“—过”の働きにみられるこのような二面性は、語彙の意味、文法的意味のいずれに比重が置かれているかの判断が極めて微妙なものであることと表裏一体をなしており、この点は龔千炎著／森宏子・于康訳 2000:193、198 の記述からもうかがわれる。
- 50) 「結果補語」とした場合、「方向補語」としての“—过”と同じ類(補語)に属することとなる。趙元任著／呂叔湘译 1979:129 が、“吃过了饭了。”の実線部における“—过”を“补语”、“—了”を“完成态后缀”とする一方で、“说过了就算了。”を“走过了桥”と同じく“趋向补语”の例として挙げていることから、結果補語と方向補語の連続性、“—过”が表わす「時間的方向性」と「空間的方向性」の連続性がみてとれそうである。時間的 or 空間的方向性については、孔令達著／森宏子・于康訳 2001:241 を参照。ちなみに、石毓智著／伊藤さとみ・于康訳 2000:255 は、“V过了”が[(動詞+过 guo)+了]のような階層をなしているとする。
- 51) 龔千炎著／森宏子・于康訳 2000:188-189 には、このような歴史的変遷の具体的な流れについての記述が、戴耀晶著／中川裕三・張勤訳 2001:196 には、先行研究において“—过”がアスペクトのマーカーとみなされるに至った経緯についての記述がみられる。
- 52) “—过”のこのような特徴は、“V到”における“—到”の性格に通じるものがある。“—到”は「結果補語」とされるのが通例であるものの、語彙の意味をとどめつつも動詞に対して文法的な働きをする成分としての性格を帯びており、その位置づけをめぐる様々な見解がみられる。これらの点については成戸 2014:8-11 で述べた。ちなみに、劉月華著／一木達彦・王占華訳 2001:95 は終結の意味を表わす“—过”を、経験の意味を表わす“—过”、完了の意味を表わす“—了”とともに「動態助詞」としている。

参考文献

- 愛知大学中日大辞典編集部編『中日大辞典(増訂第二版)』, 大修館書店(1987)。
アン・Y・ハシモト著／中川正之・木村英樹訳『中国語学研究叢書 1 中国語の文法構造』, 白帝社(1986)。
大河内康憲 1973. 「日中対照文法論 — 主語及びそれとかかわる問題 —」, 『国語シリーズ別冊 2 日本語と日本語教育 — 文法編 —』, 文化庁, 45-65 頁。
大河内康憲 1980. 「中国語の可能表現」, 『日本語教育』第 41 号, 日本語教育学会, 61-73 頁。
大河内康憲 1997. 『中国語の諸相』, 白帝社。
岡部謙治編著『この中国語はなぜ誤りか』, 光生館(1990)。
郭春貴 2001. 『誤用から学ぶ中国語 基礎から応用まで』, 白

帝社。

郭春貴 2017.『誤用から学ぶ中国語 続編2 助動詞、介詞、数量詞を中心に』, 白帝社。

神田千冬 1989.「進行・持続表現における“在”と“着”の機能分化傾向について」,『中国語』1989年8月号,大修館書店,28-31頁。

龔(龔)千炎著/森宏子・于康訳 2000.「現代中国語のテンスとアスペクト体系」,于康・張勤編『中国語言語学情報2 テンスとアスペクトI』,好文出版,183-218頁。

(原著:龔千炎 1991.〈谈现代汉语的时制表示和时态表达系统〉,《中国语文》1991年第4期,中国社会科学出版社,251-261頁)

小池生夫・井出祥子・河野守夫・鈴木博・田中春美・田辺洋二・水谷修編集『応用言語学事典』,研究社(2003)。

小池清治・小林賢次・細川英雄・犬飼隆編集『日本語学キーワード事典』,朝倉書店(1997)。

孔令達著/森宏子・于康訳 2001.「言語成分の同一性から見た助詞『过』の帰属問題」,于康・張勤編『中国語言語学情報4 テンスとアスペクトIII』,好文出版,231-246頁。

(原著:孔令达 1997.〈从语言单位的同一性看助词“过”的分合问题〉,中国语文杂志社编《语法研究和探索(八)》,商务印书馆,99-111頁)

香坂順一 1971.『中国語学の基礎知識』,光生館(訂正第2版 1974)。

香坂順一 1983.『中国語の単語の話 — 語彙の世界』,光生館。

興水優 1985.『中国語の語法の話 — 中国語文法概論』,光生館。

近藤安月子・小森和子編『研究社 日本語教育事典』,研究社(2012)。

澤田浩子・中川正之 2004.「中国語における語順と主題化 — 主題化とその周辺概念を中心に —」,益岡隆志編『シリーズ◎言語対照〈外から見る日本語〉主題の対照』,くろしお出版,19-42頁。

柴谷方良 1978.『日本語の分析 — 生成文法の方法 —』,大修館書店(6版 1990)。

杉村博文 1988.「可能補語の考え方」,大河内康憲編集『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』,くろしお出版(1992),213-232頁。

石毓智著/伊藤さとみ・于康訳 2000.「現代中国語のアスペクトについて」,于康・張勤編『中国語言語学情報2 テンスとアスペクトI』,好文出版,219-264頁。

(原著:石毓智 1992.〈论现代汉语的“体”范畴〉,《中国社会科学》1992年第6期,中国社会科学院,183-201頁)

載輝晶著/中川裕三・張勤訳 2001.「動詞の後の『着』と『过』に関する意味分析」,于康・張勤編『中国語言語学情報4 テンスとアスペクトIII』,好文出版,179-212頁。

(原著:戴耀晶 1995.〈动词后“着”和“过”的语义分析〉,胡裕树・范晓主编《动词研究》,河南大学出版社,88-110頁)

張威 1998.『日本語研究叢書10 結果可能表現の研究 — 日本語・中国語対照研究の立場から —』,くろしお出版。

張曉鈴著/原田寿美子・張勤訳 2001.「『过』と『了』の関係についての試論」,于康・張勤編『中国語言語学情報4 テンスとアスペクトIII』,好文出版,77-94頁。

(原著:張曉鈴 1986.〈试论“过”与“了”的关系〉,《语言教学与研究》1986年第1期,北京语言文化大学出版社,48-57頁)

張鱗声 2001.『日本語教育のための誤用分析 中国語話者の母語干渉20例』,スリーエーネットワーク。

張黎・佐藤晴彦・内田慶市 1997.『中国語表現のポイント99』,好文出版。

藤堂明保 1968.「客語の文頭への提前と『格』の考えの導入」,『藤堂明保 中国語学論集』,汲古書院(1987),334-343頁。

成戸浩嗣 2009.『トコロ(空間)表現をめぐる日中対照研究』,好文出版。

成戸浩嗣 2014.『日中・日仏対照研究』,好文出版。

成戸浩嗣 2015.「日中対照研究方法論(1) — “給・N+V”表現と『N・格助詞』を用いた日本語動詞表現(上) —」,『現代マネジメント学部紀要』第3巻第2号,愛知学泉大学現代マネジメント学部,77-86頁。

成戸浩嗣 2016 a.「日中対照研究方法論(2) — “給・N+V”表現とそれに対応する日本語使役表現、受益表現(上) —」,『現代マネジメント学部紀要』第4巻第2号,愛知学泉大学現代マネジメント学部,27-40頁。

成戸浩嗣 2016 b.「日中対照研究方法論(2) — “給・N+V”表現とそれに対応する日本語使役表現、受益表現(下) —」,『現代マネジメント学部紀要』第5巻第1号,愛知学泉大学現代マネジメント学部,27-40頁。

成戸浩嗣 2017 a.「日中対照研究方法論(3) — “V+O+給・N”表現をめぐる日中対照(上) —」,『現代マネジメント学部紀要』第5巻第2号,愛知学泉大学現代マネジメント学部,25-40頁。

成戸浩嗣 2017 b.「日中対照研究方法論(3) — “V+O+給・N”表現をめぐる日中対照(下) —」,『現代マネジメント学部紀要』第6巻第1号,愛知学泉大学現代マネジメント学部,19-34頁。

成戸浩嗣 2018 a.「フランス語の使役表現をめぐる対照研究方法論(上) — 中国語・日本語の視点から —」,『現代マネジメント学部紀要』第6巻第2号,愛知学泉大学現代マネジメント学部,29-49頁。

成戸浩嗣 2018 b.「フランス語の使役表現をめぐる対照研究方法論(下) — 中国語・日本語の視点から —」,『愛知学泉大学紀要』第1巻第1号,愛知学泉大学,63-82頁。

成戸浩嗣 2019 a.「フランス語の可能表現をめぐる対照研究方法論 — “savoir/pouvoir+不定詞”と中国語・日本語の可能表現(上) —」,『愛知学泉大学紀要』第1巻第2号,愛知学泉大学,53-66頁。

成戸浩嗣 2019 b.「フランス語の可能表現をめぐる対照研究方法論 — “savoir/pouvoir+不定詞”と中国語・日本語の可能表現(下) —」,『愛知学泉大学紀要』第2巻第1号,愛知学泉大学,103-116頁。

成戸浩嗣 2020 a.「達成を表わす表現をめぐる対照研究方法論 — フランス語の“arriver/parvenir a+不定詞”表現とそれに対応する中国語・日本語表現 —」,『愛知学泉大学紀要』第2巻第2号,愛知学泉大学,97-114頁。

成戸浩嗣 2020 b.「韓国語の進行表現、状態表現をめぐる対

- 照研究方法論——中国語・フランス語・日本語の視点から——,『愛知学泉大学紀要』第3巻第1号,愛知学泉大学,45-66頁。
- 成戸浩嗣 2021.「韓国語動詞の過去形と日本語の『Vテイル／タ』をめぐる対照研究方法論——中国語・日本語の視点から——」,『愛知学泉大学紀要』第3巻第2号,愛知学泉大学,33-53頁。
- 成戸浩嗣 2022.「属性可能を表わす“能／可以V”をめぐる対照研究方法論——日本語・フランス語の視点から——」**（本号掲載）**
- 西光義弘 2004.「英語のトピック構文」,益岡隆志編『シリーズ◎言語対照〈外から見る日本語〉主題の対照』,くろしお出版,115-127頁。
- 日本語教育学会編『新版 日本語教育事典』,大修館書店(2005)。
- 日本語教育学会編『日本語教育事典』,大修館書店(縮刷版 1987)。
- 日本語文法学会編『日本語文法事典』,大修館書店(2014)。
- 野田尚史 2004.「主題の対照に必要な視点」,益岡隆志編『シリーズ◎言語対照〈外から見る日本語〉主題の対照』,くろしお出版,193-213頁。
- Peter Hugoe Matthews 著／中島平三・瀬田幸人監訳『オックスフォード 言語学辞典』,朝倉書店(2009)。
- 久松健一 2002.『英仏日 CD 付 これは似ている！ 英仏基本構文 100+95』,駿河台出版社。
- 久松健一 2011.『ケータイ [万能] フランス語文法 実践講義ノート』,駿河台出版社。
- 平井勝利編著 1989.『Step-up Chinese』,同学社(10版 1997)。
- 平井勝利監修／加納光・白木通・成戸浩嗣著 1991.『ようこそ,中国語の世界へ!』,白帝社。
- 平井勝利 2012.『教師のための 中国語音声学』,白帝社。
- 藤田裕二／ミドリ・ティオリエ 2013.『聴くと話すと同時に身につく フランス語シャドーイング入門』,(株)DHC。
- 古川裕 2001.『チャイニーズ・プライマー——New Edition——』,東方書店。
- 北京語言学院編『中国語教科書 下巻』,光生館(1960)。
- 北京大学中国語文学系現代漢語教研室編／松岡榮志・古川裕監訳『現代中国語総説』,三省堂(2004)。
- 松村明編『古典語現代語 助詞助動詞詳説』,學燈社(1969)。
- 三上章 1953.『現代語法序説 シンタクスの試み』,くろしお出版(復刊 1972)。
- 三原健一・高見健一編／窪園晴夫・並木崇康・小野尚之・杉本孝司・吉村あき子著『日英対照 英語学の基礎』,くろしお出版(2013)。
- 村木新次郎 1975.「『水を飲みたい』のに『水が飲みたい』とは?——いわゆる対象語」,大久保忠利・奥津敬一郎編『新・日本語講座2』,汐文社,111-124頁。
- 村木新次郎 1989.「ヴォイス」,北原保雄編集『講座 日本語と日本語教育 第4巻 日本語の文法・文体 (上)』,明治書院,169-200頁。
- 山岸共 1965.「主語の再検討」,『中国語学』第148号,中国語学研究会,10-12頁。
- 来思平・相原茂著／喜多山幸子編訳『日本人の中国語 誤用例 54例』,東方書店(1993)。
- 李臨定著／宮田一郎訳 1993.『中国語文法概論』,光生館。
- 劉月華著／一木達彦・王占華訳 2001.「動態助詞『过₂』『过₁』『了₁』の用法比較」,于康・張勤編『中国語言語学情報4 テンズとアスペクトⅢ』,好文出版,95-124頁。
- (原著:劉月華 1998.〈動態助詞“过₂”、“过₁”、“了₁”用法比較〉,《語文研究》1998年第1期,山西省社会科学研究所)
- 北京大学中文系 1955・1957級語言班編《現代漢語虛詞例釋》,商務印書館(1982)。
- 劉月華・潘文娛・故韋《實用現代漢語語法(增訂本)》,商務印書館(2001)。
- 呂叔湘主編《現代漢語八百詞(增訂本)》,商務印書館(1999)。
- 趙元任著／呂叔湘譯 1979.《漢語口語語法》,商務印書館。
- 朱德熙 1980.〈與動詞“給”相關的句法問題〉,《現代漢語語法研究》,商務印書館,151-168頁。(原載《方言》1979年第2期)
- Charles N. Li and Sandra A. Thompson, *Mandarin Chinese* (University of California Press, 1981)

(原稿受理年月日:2021年12月16日)